



° 0054530000 °

0054530-000

388.91-Sa85ウ

民謡の研究

佐藤惣之助・著

文化書房

昭和21

AID

917.13

36291
SA 95

民謡の研究

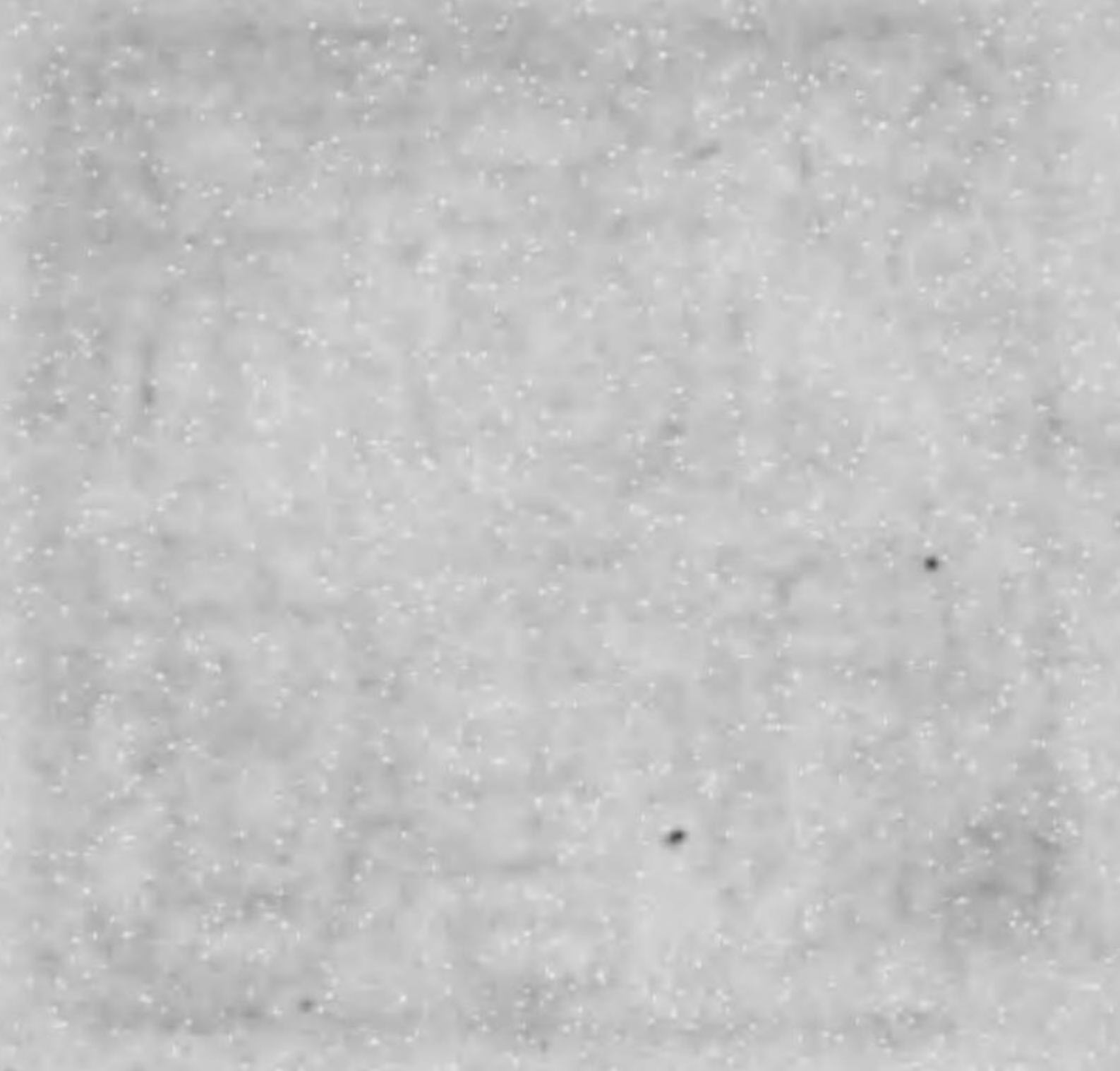


民謡研究



目次

民族とは何か.....
 民族の發生.....
 民族の發展.....
 民族の時代性.....
 民族の國際運動.....





民議
の
研究

佐藤惣之助

味ひが出てゐたのであります。

更にくはしく申しますと、「この上代の人々の中に興発たらしむる」の心が、歌とも謡ともつかぬ自然の形式をとつて行はれてゐるうちに、我が國獨特の和歌の根本をつくるやうになり、やがて行的な型が出来ると、自然歌ふものとは區別されて行つたもので、それが謡、つまり自然に口から送つて行つた律動そのものが、謡の根本となつたのであります。従つて「歌」といふ字と、「謡」といふ字に分れ、歌はどつちかと申すと詩的の格があり、それがいつか「連歌」となり、「俳諧」となつて文學的に發展し、謡は辭に合せて唄ふもの故に、音樂的な律動をとり、後の「神樂」とか、「能楽」、「今様」、「風俗」、「安曲」といつたものの根柢をなして行つたのであります。

つまりこの「歌」と「謡」との分岐點が、その時代の文化の基準で、やがて文字に記し、調律に合し、鼓つて作意したものと、暗野性的に、樂曲的に行はれた謡との分れ目であります。そして又この頃の文化の中心が宮廷でありましたから、「歌」は宮廷で歌え、「謡」は祭祀の場合とか、一般の人々の間へ投入して發達して行つたものであります。この點はいつくの國でも左様でありませんが、殊にわが國の精神文化の根本をなすものであると申されて居ります。

そこから考へて行きますと、では上代のものは悉く歌謡で、歌と謡との區別もなかつたと云はれますが、さて、それが海にむづかしいところで、「歌らしきもの」と「謡らしきもの」とは、形よりもその心でありますから、更に謡の部へ民謡といふ字を用ふるとなる、もうずつと後の徳川朝のことになります。ですから上代に、「神樂」とか「安曲」として當時の舞臺を唄つたものが、だんだん卑俗になつて来て、「民謡」でさへ「謡」をもつやうになつた。そして獨自の發達したものが、初めて眞の民謡であります。ですから「民謡」とはつきり云ふやうになつたのは更に明治の初めで、この古い歌謡時代からの、「一般的な庶民のもの、野の匂ひ、山の味、海のひびきのある卑俗な解り易いものといふ風に、はつきりと昔からの精神を曳いてゐるものと云ふやうになりました。ですから古い歌謡の形式を曳いてゐるところのものでも、「連歌」なり、「俳諧」なり、又は後の「淨瑠璃」「小唄」といつたものは、民謡であることはあるが、今日では又別の範疇に入るべきものとなり、民謡と云へば、主として古い地方に發達したものに限るといつた傾向になつたのであります。

「古くは二種の書物、古くは、「古事記」「日本書紀」「古語拾遺」「古語拾遺」「古語拾遺」「古語拾遺」の書物があるもの、ある年代を定めたので今日馬場の書として記され、今日の「古事記」「古語拾遺」が何故馬場でないか——といふ疑問もありませんが、それは誰でも疑問として持つてゐます。この二つが馬場自の自然的な原因があつて、今日「馬場」とは何か、何を指すのか」と問はれれば、すぐ古事記のもの、馬場を指したもので、そして「古語拾遺」の、古い書のあるものといふ風に説明するやうになりました。然つて昔から馬山ある處に、馬場と書いてよいか、馬場といつてよいか、書物としてよいかといふ決定は、なかなかむづかしいのであります。

そこで我々は、この馬場といふ文字の決定を今日のレコード等の書籍に置いて、古い書物も馬場として取扱ふといふ風になりました。それは万葉の「馬場」な馬場といふも、歴史的な、年代的なものといふ風に思つて、今日の「馬場」と取扱ひます。ラマヤでは今日「馬場」といふ字を馬場といひて、その中に馬場のまゝの馬場をも含めてしまひましたが、それが一ひの字だけであらう。その馬場や馬場が「馬場」に、やがて「馬場」といふと、「馬場」といふ字が「馬場」といふ字で、その馬場の馬場から「馬場」といふ字が「馬場」といふ字で、

馬場も「馬場」では、いへば馬場の、今日の馬場では「馬場」といふ字で、

では、そもそも馬場の初まりはと申しますと、馬場に書つてあるものでは、支那の古代の詩を採めた「古詩」といふ書の中へ「馬場」といふ字が「馬場」であります。これは有名な魏といふ帝王の時代に、書の中が大いに書平であつたので、ある百餘の書物が、魏といふ木製の器具を打つて書つたといふのであります。

- 日出で、作し
- 日入つて息ふ
- 井を掘つて飲み
- 田を耕して食ふ
- 刀、我に干て何かあらんや

といふものであります。讀んで字の如く、のんきに耕作して暮すことが出来れば、帝王の力も強ひて關係はない——といふ地に支那の百餘の本音であります。然しこれとて、「馬」といふ字が用ひられて、また「馬」とは書はなかつたものであります。

更にわが國のものになりますと、馬場馬場の書物、

八重垣つ

出雲八重垣つまごみに

八重垣つくるその八重垣を

といふのが、初めて和歌の體を成したものと云はれて居りますが、それから以後の「記」でも「萬葉」の初めのものでも、どこまでが和歌で、どこまでが歌謡かといふ區別は全くありません。この時代は、愛の歌、軍の歌、旅の歌、狩の歌、酒宴の歌、宣諭、などが、心のまゝに自由に歌はれたもので、體裁のはしげやし

わざへの方よ

盛る立ちくも

といふのも、字句が起りないので「片歌」と稱されてゐる位ですから、民謡としての内非よりも形で分類するやうになりました。

従つて、民謡としての心を歌つてゐる歌は海山あつても、また獨立することなく、歌の二つの體として歌謡があつたのであります。それがはつきりとして来たのは、すつと後

の、光格天皇の御代に、儒者の赤松素誠といふ人が、門人に小唄と民謡との相違を説いて居ります。それによると、「民謡とは民の謡なり、俳諧を廣めていふなり、小唄は今三弦の唄となれり、されば小唄のうちにも民謡あり、然し民謡は本来三弦の唄にあらず」と云つて居ります。

和歌の形が、だんだん歌謡となり、「談樂」「田樂」「狂言小唄」となつて、所謂「庶歌謡」として發達し、今日の三味線ものに及んだやうに、「紀記」「萬葉」からだんだんに地方へ侵入したものは、全く野外で發達し、自然民謡としての土産を樂いたもので、よくある讀人不知といふやうな庶民の中の無名詩人が、自作を雑律に托して世に廣めたものです。といふよりも、口から耳へ、耳から更に人の口へと移して行つたものです。一方官廷の歌謡は文字に記され、又は祭祀や酒宴に傳はつたが、一般庶民のものは風のやうに廣く、原始的な形をとつて諸國へ流れた、それが船頭歌であり、やがて馬子歌のやうなものとなつて廣まつたのであります。従つて官廷で神を祀る「祝詞」とか、神樂歌とか、「今様」といつた儀式めいたものが發生し、後の「謠曲」や「仕舞」「狂言」となつていつたやうに、旅の歌とか、戀の歌が、自然に庶民の間に廣まつて、口から耳へと發展して行つ

どうしたとか、お菊とか、おかつとか、お小夜とか、郷土に有名な美人を唄ひましたり、或は鳥の男女が戀をして、お互ひにその戀情を嘆くとかいつたところから生まれた唄が深山にあります。

それと同時に人間といふものは、知らず識らずのうちに律動といふものを感じ、喜びの生活でも、働きの生活でも、同じリズムをとつて行動してゐると、いつの間にか何か口ずかすものがあります。ホシ坊がよい心持の時は、ウ、ウとか、アウアウ、アアとか自然に発音するやうに、われわれは外を歩いてゐる時でも、車を走らす時でも、或は臼を使ひたり、物を織つたり、石を運んだり、田植をしたるといふ時に、必ず一定の律動に伴ひ、その運動の本質として、何かしら口に誦へる。事實さうすることによつて、單調な歌、勞苦を減らし、體力を増すことになるのであります。そこに労働の民謡が生れてくるのは全く自然の働きでありまして、それがその動作に伴ひ、巧みに伴奏がつけられ、合唱が加へられ、文句と曲とが一つに渾然と融合して、賽打唄とか、臼挽唄とか、田植唄となつて歌はれるのであります。

古い民謡の歌も、よきもそごにあるのであります。自然に音韻でころがされてゐた文

句が、自然の韻となつて、いかに純くとも、いかにその風格を持つてくるやうに、郷土と生活と、その環境が一つに溶けあひ、無に倒む者、別れを悲しむ者、郷土を慕ふ者が、文字ならざる人間の血と血によつて、口から口へ傳へられる。大衆は群衆による自己表現の機關を充ち得たのであります。そこで人間の第二の天性であるところの郷土愛に殉じ、故郷の山、川、海、そして花、雲、小鳥、更に肉親、戀愛といつたものを次ぎ／＼に唄ひ初めたのであります。世の中がいくら戦國時代であらうが、政治に改變があらうが、祖先以來住みついた土地はなつかしい、住めば都にまさる故里だ。そこに愛郷の唄、そして農事の唄、工事の唄、くはしくは田植唄、草取唄、賽刈、賽打、種蒔、米揚、臼挽、田打、桑摘歌といふものを唄ひ出しました。更に工人は地挽歌、木やり、木挽、石曳、金掘り、煉上歌を唄ひ、漁夫は大漁歌、酒歌、馬子は馬子唄、酒屋は酒造り歌、雲助は長持歌といふ風に、その生活の律動と共に、彼等は彼等らしく、その傾軋によつて呼吸し、喜樂し、感傷することを知つたのであります。

従つて鼓、太鼓、笛、箏、三弦などと云ふ樂器が用ひられる前に、先づ原始的な調子で手を打つとか、石を叩くとか、さらさらを摺るとか、自然に何かしら伴奏を必要として來て

「言かけて事ゆか
風をくはして」

「口に立ち」

で、あるとか、

「風の立ちをりや」

「いま時のか出よか」

身をば投げうかと

思ひ候。

といった風に、思ふことをすばくと云つてのけてゐる。かうなる上作者が誰かといふことよりも、思ふ者が作者の氣になれるのです。「思ふの特長はそこにあつて、現代のものやうに作詞者や作曲家がきい顔せず、あくまでも女子供や平凡な人並を造る人の代聲者となつて、草野なことを草野のまま、愛國して、國も第一條の幸福と稱しさを食めてゐるところが、その無名作家の手刺でもあります。

かうして古民謡は、人の口から耳へ傳へ、それが多く人の心を打ち、胸に沁みるもので

あつたから、自然に多く記憶され、人の心を驚くだけの歌のないものなら、そのまま傳へられてよいものだけが傳つたのでありますから、何千部のうちか何百と傳んだやうなもので、一す今日の歌謡の歌壇ならぬのは事實であります。「これは日本ばかりでなく、支那でも印度でも、又アフリカの國々でも同じでございまして、昔の「口傳」も「歌」のやうなものであります。つまり思ふ者の心になつて作り、作つた者の心になつて傳ふといふことであつた、その時代の、その生活がびつたり一貫したものであります。又左様でなければ歌も傳ひませんし、今日まで傳らなかつたのであります。

以上、概つと説いて來ましたやうに、民謡とは何か、われ／＼とどういふ關係のものか、そしてどうして出來てきたかといふことが、はっきり解のことと存じます。只、この間に傳へられたとかであつて、その中には諸君にとつて面白いものもあるし、傳らないものもあるといふ時は又別に、新井の歌謡、高野聖之、柳田國男、折口信夫、藤澤新庵、小寺隆吉氏等の著作を讀まれるのによし、或は「民謡研究」といふ本が出てゐますから、それによつて、出来や、古事や、歌謡を傳へられるのも一方法であります。

民謡の種類

日本に於ける古い民謡は、記録されたり、郷土の人々の口傳に傳はつた以外に、どれ程澤山あつたか、今では全く遺傳がつかないと云はれて居ります。上代から和歌文學が盛んであつたやうに、民間の口傳、俗謡といふものも非常に盛んであつたが今では全く忘れ盡され、夢のやうに消えて行つたのでせう。尚に觀念で、古謡の採集記録の大切なことも解り得せう。然し大體に於て、これだけの種類があつたといふことは、ほとゞ記録によつて明かになつてゐるのは、農事や工事やその他の勞役に限らぬであらう。

これは常に日常生活に於て、その産業的な仕事に於て、水く頃はれて来たもので、その勞働の動作とびたり一致したものが多いのも解ります。例へば田圃は田を耕する時の動作のゆとりを持ち、地謡歌はそれだけ遅く、舟歌は漕ぎを急ぐ、舟子歌は風のやうに明るく——といふ風に、労働しや調子といふものがついているたものであります。それが酒の歌や遊樂に合はせるとなると、自然に變化して来て、舞の歌が町へ来たたり、山

の民謡が海岸へ行つたり、いろいろと變化して、異質を失つてゆくのであります。遊藝であつた遊分けが、町の女體に似はれると、全く別な文調になり、おけさや學生體に似はれると、まるでスポーツの歌になつてしまふやうなもので、民謡はその文句も大切ですが、其の曲調といふものが生命でありますから、なるべく原形のまま、その生れた土地で聞くのが本當であります。

では現在知られて居る種類はどのくらゐあるかといふと各地の郷土の歌は何千あるか一々見當がつかませんが、勞役の歌はほゞ四千餘種で、大體して見ると、勞役の歌に、

車歌、田うなひ歌、田圃歌、苗歌、朝刈歌、暮刈歌、草打歌、種播歌、米播歌、草摘歌、種刈歌、白地歌、種播歌、田打歌、草刈歌、桑摘歌、茶摘歌、茶採より歌、茶揉歌、祝ひ歌、田歌、山歌、

その他、まだく澤山の勞事歌があります。又が工事の歌で、

地謡歌、木置歌、石置歌、大工歌、石巻歌、木置歌、金置歌、棟上げ歌、

更に他の勞役の場合、今では入らば農圃工事とか、職業の歌といつたものの歌には、

酒造り歌、船歌、舟歌、舟歌、馬方歌、牛車歌、雲助歌、長持歌、木置

うしろは山に、前は海。

といつた歌謡のものや、

曇らば曇れ、晴れば山、

晴れたとて、お江戸が見えるではなし。

・といふ抒情歌のあるものもあるし、白拍子に

曇らばよりな、もとの歌

・歌なくてお前とそはで、氣の毒。

といつたものや、

白拍子たびだ、思ひ出す

おいとしや、あねごは江戸のこをやに

といふやうな人情のこもつたものもある。そして更に工部歌の方になると、どうもかど

かつたら長い文句が多く、大勢で合唱する性質のものが多い。雑歌に

そらく、地獄の輪まはり、ロイロイロ、人並二十五代なり、ロイロイロ、てんわうそ

の時に、ロイロイロ、せいり人と、いふ人と、ロイロイロ、じんごー人と、いふ人と

ロイロイロ、初めて情を願立て、ロイロイロ、上のさるわといふものは、ロイロイロ

天の道と道へまぐ、ロイロイロ、下の道といふものは、ロイロイロ、道の道と道へ

まぐ、ロイロイロ、東は日の本月の本、ロイロイロ、西は西の方月の本、ロイロイロ、

南は南水、水の本、ロイロイロ、北は南西、木の本、ロイロイロ、これで歌謡と申し

ます。ロイロイロ。

といふ風に、歌かが作つて、一般庶民は容易に歌を宣傳したり歌へたり、所謂歌に文字なき者に、口から歌へた耳傳歌といつた方法をとつてゐるのであります。又新聞には、

めでたい、これはお前、朝おろし

・地にや資金を積み来る、オヤ、ナーヨ

といふ調子のもので、木蘭歌、座敷のはめ歌、結婚の歌、酒宴の歌などが舞山舞つてゐます。そして中には「くどき」といつて、長い物語式のものもあるし、長唄風のもの、かぞへ歌の風のものがありあります。これはいつれの府縣でもさうで、替くわしくは、

文部省で集めた「何曲集」とか、古く尋常文藝行の「日本民謡大会」博文館の「俗曲集」

などを見るとよく解ります。更に他國へ目をやつて見ると、上州には有名な馬子歌で、

と、世間の「へつともいふ」三島へ下つて「あまふし」「藤原の」「新編」「下田の」「下田ふし」「それから」「名古屋近郊」とか、「伊勢青洲」又は新しく「中木ふし」「阿波國」「土佐の」「よさこいふし」「博多ふし」「伊勢ふし」「藤原ふし」「前木の」「田原ふし」とか、長崎の「唐人屋」とか、琉球の八重山の「島歌」、京都の「殺人歌」と、ずつと見聞して行つたら大體なもので出題の「安楽」「富士」おはら「新編の」「三浦ふし」「佐賀の」「おけさ」「秋田地方の」「おばこ」「仙臺の」「さんさ時間」「北海道の」「道分」「新編の」「新編ふし」「水戸の」「あふし」といつたやうに、殆ど日本は見聞であります。

そこに特別な種類と項目があつても、それより更に面白いのは武士であります。こればかりに惹かれますが、とにかく機会を設けた話書員、つまり小唄、雑歌、長唄の類は別として、自然のままの、生活そのままの時代と一貫性をもよく一貫した話書といふものは、この話書の中に数はつてゐるのではありません。

以下、もう少し私の好きな古いものを挙げて、
(田原近郊)
あにさうらう、正月にやうきよう

水の夏中に草取ろう
かあい歌御の田草とりは
涼し風吹け空くもれ。

(夏島歌)
夏は来よと
何を土産に、梅幸、さては来夏の御歌
(十七ふし)
十七かひろのこぐらに鞠りねて
花がかゝると夢に見た
十七が朝川わたる、かはいさよ
わが子妻なら、負ふて渡さう。

などは、いかにも明るい、そして素朴な文字のうちから、強い風情の味を感じ取つて呉れし
いものであります。

但しこゝでは、その話書としての例をあげただけで、巻の巻花とか、内容の長短、巻

86
といったものは、又後で述べることにして、今日、實は其の整理する者の要には、ほんとうの區別、類別といふことは出来なくなつて居ります。何故と申しますと、前にも述べたやうに、時代がはつきりせずにはつたものや、その土地々々に明はれたもの、中には、文句で區別することが出来ず、確かなことを云へば、その標題し、聲の調子で類別するより道がないからであります。

それは文字に記するよりも、人の口から唱つて賣つて、それを聞いて、私達の中の感覺と情緒で區別するよりほか、實に民謡の精神と實質はないのであります。學者はその古歌來歴を悉く調べます。私達も出来るだけ正確な調査をしたいと存じます。そしてこれを記録し保存するに、音でないやうに努めて居りますが、さて一つ／＼を確かに聞いて、批評するより比較研究するといふことは、なかく容易ではないのであります。

従つて私には、確かな分類と類似の吟味といふことは出来なく、先づ大體に古來からの形跡を引いてあるもの、各地に發生して變化したもの、それに生活として並びとして、いろいろに明はれる場合を考へ、先づ以上のやうに、農事、工事、神事、儀式、季節のものといふ風に分類して居ります。そのほかにも歌で明はれるもの、聲びに明はれるもの、

暗口誦まれるものといふ風に、明はいろいろな場合がありますし、小唄とか、童謡とかの區別もありますので、一概に論じ置かないのであります。

最後に申さねたいことは、この民謡の原流が上代の歌謡から来て、更に分れたところの後世の歌謡例へば「関吟集」以後の「萬葉集」「新撰集」「万葉集」「三味線の組歌等にも體現し、又互に入り混れて「浮城集」「歌集文」「歌謡集」その他多くの要歌から系統を引いたところの「河東集」「一中集」「書野津」「宮本集」「新内集」といったものにも、深い相互關係があるといふことを注意して頂きたいと存じます。

それらのものの中には、全く民謡そのまゝのものを移し植えたり、もじつたり、受継いだものがありますので、「一寸こゝでこれから研究なさる方々に、申さねて置きます。

民謡の社會性と時代性

民謡がいよ／＼官廷の和歌文學や佛國樂歌から離れて、すつかり民謡自身として獨立したといふことは、全くその時代の社會情勢の結果でありまして、殿上人や都會の知識階級

33 から離れ、庶民一般の生活力が強くなつて来て、その社會性といふものがはつきりして来た結果であります。

人々はもうむづかしい官能の言葉で固まれた歌謡を、むりに真似する必要もなく、又都で發達してゆく庶民などから離れて、戸外で、街道で、畑の中で、お互ひの唄を持つやうになつたのですから、その喜び、その自由にまかして、歌唄ふともなく非常な勢で、各地の唄が出て来たのであります。その結果、前編で述べたやうに、いろ／＼の農事歌、勞役歌、などとなり、人々が集つて、お互ひにたのしく唄ふところに、民謡魅力もますます強くなつて發達してゆくやうになりました。そこに民謡の價値といふものも生じ、社會生活になつて行つたのですから、民謡といふものゝ文化史的價値は極めて重大でありました。當時のわが國の社會制度や時代性を考ふるのに、最も必要なものであります。

人々は集れば話をします。農事や人の噂やいろ／＼な話も盡きると、何か唄ひたくなります。そして唄を唄したり、舞を打つたりしてゐると、いつかのんびりした心になつて、

知らず／＼詩人になり、何かと唄の文句をつくつて、貧しいメロデーに和して唄ふやうになります。女子供も又唄ひます。そこへ旅人が来れば、隨處の話を聞つた唄を傳へませうし、神主は田植の神事に、田の神の奉饗歌を教へる。やがて盆踊りとか正月の行事にも唄が必要になるので、隨處の者から聞き覚えてくるとか、又僧侶などが和歌のやうなものを作つて、信仰と共に士民を導くといつたやうに、既に一丁字のない者でも、口から耳へ傳へられて、歩きながら、仕事をしながら、いつとはなしに口誦じ、家を述るといつては地場の唄を傳へ、練上式をやるといつては京や鎌倉から傳はつたものを習ひ、結婚式の座敷に、正月の酒宴に、村の盆自慢が讀つて唄へば、一聞が又いつともなく聞き習ふ。そこに民謡の分布といふものが、非常に廣く、しかも生活的に植まつけられるのでありますから、到底何人の力をもつてしても、人の口に戸は立てられぬ道理で、唄のよしあしも亦自然に選ばれて行つたのであります。

それが京から鎌倉、やがて大阪、江戸の繁華、となると、九州も東北も又傳しなべて、その社會制度の下に、その時代と共に、自然に變化してゆく唄を歌ふといふことになるのは自然のことで、「唄は世につれ、世は唄につれ……」と謂はるゝのもこのことであります。

そこで農作の唄も出来る。大漁の唄も出来る御道が拓かれて馬子の唄も出来、海路も通じて新編の唄も出来る土地の名産とか、名人、名木、名詞、そして天災、地震、だんく、細目になつて、土地の美人、金持、道楽者、戀人といったやうなものまで唄の材料にされる。そこで、どこの港はよいとか、どこのお小夜は美人だとか、團の小高がどうした、東金の雄右工門さんがどうした——といった唄が出来る、人々が面白がつて唄ひ囃すといふことになる。更に酒とか、花とか、團の別れ、思ひ合ひ、若いころのあこがれ、やるせなさ、佗びしさ、悲しさ、それが巧みに地方語で唄はれるやうになつて、「おばこ」などが出る。と同時に又「葉ぶ唄」といふものがあつて、當時の爲政者とか、大名、地頭などを諷刺する。その落首といつたものが全國へ賣れる。これは古い支那の物語などを讀んでもよく出てくることで、暴政を宥いたり、暴虐な大名のやうなものが出たりすると、無名の作者が落首を作つて、どこの歌へはりつけたり、子供に唄はしたりして諷刺する。日本でもこれはよくあつたらしいが、あまりその材料が盡つてゐないのは残念であります。

鎌倉の、かちのむすめ
 日本の、天下のしやれをんな
 しやれをんなに、油をつけて
 オヤ、十五夜の月を
 シヤ、鏡にしよ
 これなどは、明るい、人の評判といつたもので、少し小説的なものになると、
 あの山見れば思ひ出す
 わが殿は
 あの山陰でうたれた
 といふのがある、この歌などは所によつて、いろ／＼に唄はれたものらしく、「正月の水鏡で討たれた」とか、「川のほとりで討たれた」とか、各地で異つてゐる。
 アリヤ、何處の殿様だ
 お子さん恐れ
 泣く子もたまる

これなどは甲斐の國の村人が、家産を賣つたものである。更に子守唄などになると、一種の社會書、時勢や地誌の歴史がにじみ出ているのであります。

子もりさすよな罪性な親が

なぜに乞食をさせなんだ。

守りが守りせず子に保護さして

家へかへれず斬に處た。

わしが死んでも泣く者ないが

山の鳥と親ばかり。

わしのよな又阿呆もりおいて

西も東も知らぬ子に。

河の町から東の町まで

唄うてあるくは守の役。

貧乏の小娘が子守に雇はれて、泣きながら唄ふといったところに、いつか社會世相のあ

らはれが如實に現れてゐます。更に、

親は薩摩に子は島原に

浪花かや、ちり／＼に

といったやうなものになりますと、可愛い、わが娘を遊女に賣つた哀れな親と、その娘のころろといったものが、うす／＼感じられます。又船頭唄で有名な、

船頭かはいや香戸の瀬戸で

一丈五尺の輪が掬る。

となると、備中首戸の瀬戸の瀬の掬さや、そこを乗切る船頭の生活の辛さがしのばれますし、又

大工すりや、細る

二重まはりが、三重まはる。

といった工人の喘ぎ、二重廻つた帯が、絞せて三重まはるやうになつたといふのであります。

そこに飾り氣のない、直接法は、人間性をそのまま、唄ひ出してゐるところに、民謡の尊

44 さいがめりす。又

あきもあかれらせぬ事なれど

腹をやりす、腹をやり

といふやうな家産もあつたのでありませう、

七ツ下りて田の事とれば

田舎の事かや、田舎かや、

といつた風に、夕暮になつてもまた暮暮せねばならぬ大層百姓の腹が腹はたて腹りす。

こころ腹腹で、むしや腹を腹り

今はならはぬ腹をする。

といふやうな、女の時にも生れの腹もあつた、

山腹、山腹より、山いもの事

ならぬ世事は、なほからこ、

といふ腹になると、今も會と腹に社會の生腹が腹ひやられます。然し又そのからこ

問て、各地の名所や、郷土愛といふやうなものになると、明るく、朝もかでのしのしん腹が
沁み出てまゐります。

宇治は茶どころ、茶の産どころ

娘やりたや、娘ほしや、

二度と行くまい丹後の宮津

朝の財事が空になる

来いといふたとて、行かりよか使渡へ

使渡は四十九里波の上

土地の人の心、旅人の心、それが一體の真意をも含めて、無いなかに、はつきりと喝は
れてゐるところが、民衆の眞意であります。そして、更に一步突き進んで考へて見ます
と、もうこゝには個人としての眞意ではなく、廣く大衆としての、腹の心にもひくもの
が生じて来て、いかに民衆といふものが複雑のもので、単純ならずに、眞實と人間味とを、
はつきりつかんでゐるか解るのであります。そこに民衆の社會性といふものが、確かに
存在し、腹ろけながら、腹腹、腹腹、自由、といふものが腹腹の、腹腹、腹腹、腹腹とい

46 つた意識がはつきりして来るのであります。

それには官廷と庶民、荘園時代から戦国武家時代、士農工商時代といったものが決定した頃の、社会の動きを伴つてゐるのであります。何といつても一般庶民、殊に農夫や工人はものが云へなかつた時代でした。又華門のある人物もなく、いつも上に立つ人の下に黙々と働いてゐたのですから、筆をとつて詩とか物語草子は愚か、記録といつたものも誌す人は勢なかつたのであります。そこで萬事は地頭とか、寺の和尙に頼んで、何かのことは唄にかこつけて歌を吟らし、又歌謡をつくしてゐたもので、悲しいにつけ、うれしいにつけ、人間的に懐かしいものは民謡であつたのであります。否、民謡などは云はずに唯唄、唄、口から出る歌でよかつたのであります。そこに複雑した心持も又むづかしいことも一切含めて、単純に、直截に唄つたのであります。然し、人間が多く、國々が廣く、だん／＼開けてゆくにつれて、社会道德の上から、風教といふものがやかましくなつてくるのは自然で、室町時代と徳川時代と今日では、その意識の點で大變な進歩があります。

古くからも按の布告といふものはあつた、それから戦争、法度といふものが出来、今では法律ですが、昔はかなりのゆるやかであつたが、然し佛教、儒教、神道といふやうなもの

が旺んになるにつれ、人倫の道も定まり、年貢とか、賃金、貸借問題もはつきりして来て、その時代の社会観といふものが組織されましたので、民謡に現はれたその現象といふものをよく聞して見ますと、根本は、やはり佛教的な無常感といふものが流れて居ります。月を見て花を見ても、離し愛しあつても、やがて悲しい別れや死がくるといつたやうな心持が、何かにつけて現はれます。その質朴、淳厚な生活の中にも、この思想と感情の片鱗は窺はれるのであります。

47 然し唄といふものは、もと／＼悲しい時に唄はれるものが多いので、あまりの悲しみとか傷ましきといふものはないのであります。まびしさ、あきらめ、といふやうなものはない、憎しみ、恨みといふやうなものは影がうすくなります。個人的な苦しみとか悲しみとかを歌つても、人は同情こそすれ唄ひて唄はうとはしないのであります。これは自然の道理でありまして、多くの古謡を見ても、あまり激しい事實的なものは、他の座敷唄の宮録とか、説教、物語類に譲つてしまつて、朗らかなのんきな、おもしろい、陽氣なもののみが多く残つたのであります。従つて當時の社会はどうであつたとか、その道德、その制度といったものも、唯小さな影をのこしてゐるばかりであります。然し乍ら、民謡の流

然れ、その分布、又は盛衰といふものが、當時の社會の發展力であつたことも事實であります。今日での社會問題は多くいろいろの部門に關れて研究されてゐますが、以前は生活が單純なだけに、今日の民謡の批判とは違つて、それほどむづかしい問題ではなかつたのであります。

今日の歌謡が、やゝもすると社會風貌上よくないとか、チカチカな思惑感情を盛るといふので、讀者を苦しめてゐるやうですが、むかしだつて、（註）意趣はよくない、徒らも、偽りも、純不孝も、反逆も、背信行爲も、みんなよくないとして、第一にさういふ民謡があつたとしても、今日では置殺してしまつて居るのであります。つまり唄つて悪い、顔をかめるやうなものは、やつぱり人が唄はなかつた、唄つたとしても認して、やがて棄てたのであります。尤も地方へ行くと今でも（註）卑賤な唄がよく盛つて居りますが、男女間のことば、まづお笑ひとして、滑稽として、諷刺してゐたのであります。これは土人の唄、（註）庶民あたりの唄、又田舎の雑取りなどで、わざと人を愚氣にするために唄はれるもので、一度聞けば笑ひ出すが、二度三度では閉口してしまふ（註）愚弄物のもので、（註）もちろん民謡としても藝術價値のあるものではありません。むしろその反對で、（註）卑賤なものは民謡の敵

でさへあります。

そこで次は、民謡に於ける時代性といふ問題になりますが、所謂、宮廷の歌謡から離れて、全く民謡として獨立してからといふものは古代なものは古式、新しいものは自由となつたので、さぞかし變化と影響があるかと思ふと、これもさのみではないのであります。

元來が民族性といふものと、郷土性といふものに表したものですから、京や鎌倉の影響で、多少は移動分布するといふものの、ほんたうにその時代性の本質を消化しきるには、民謡はあまりにも古心（註）淳朴であつたやうに思はれます。

宮廷で御即位があつたとか、法令が新しく布かれたとか、戦争があつたとか、（註）起星が出たとか、全國的に大きい事件があつても、なか／＼一郷一村の生活の唄の中へはひびいて來なかつたやうであります。唯、それが盛町以降になると、都の知識階級が、座敷小唄から、長唄といふものに發展し、四季ともに消聲巖山に用ひるといふ時になつて、この時代性の影響といふものが唄に現はれ初めたやうであります。それも文政年間には、奥州傳の（註）琵琶法師が初めて（註）或城渡來の蛇皮鼓を、三味鼓といふものに改良し、（註）薩長よしの唄、（註）薩

とか、石村繪枝といった名人達が出て来て、ずっと慶長年間へかけて活躍しましたので、ますます都の町人達が派手を競ひ、日夜夜毎、咲花唄を要求するやうになつたおかげであります。そこで耳新しいこと、眼新しいことを取入れて来たので有名な、長崎の唄、むかしより今に渡りくる風船唄がつくれれば唄の餌となる

サンタ・マリヤ

といったやうな、エキゾチスムな唄も唄はれるやうになつたのであります。その系統がどうか知りませんが、後に、丹波の島唄にも、

月は東に、スバルは西に

いとし殿御はまん中に。

といふやうな風流を唄はしたるものさへ出来ました。尤もスバル星は長崎の星で、秋スバルが唄はれた姿を見て、百姓は夜更の唄などを胸よと申し傳へて居りますから、さして珍らしくもなかつたのでせう。然し、

これは京唄の子の色もよや

目新しい手ぎは、やもよや、清や
あら、都廻しやのう
といつたものとか

尺八の一節ぎりこそ音もよけて
君とひと夜は、もたらぬ、

あら、心なの君さまや

といふ風なものになると、もう領土の人々の感覚には、何のことやらわからぬ、これは伊達な京の風俗であり、その通人達がもてはやす當時の流行唄であるからであります。それが、

ことし御上洛、上様禁目

花の都もなほ禁目

となると、京に登つた百姓にもや、解つて来るし、それが郷里へ歸つて、ことし世がよて儲がさいて、

殿も百姓もうれしかろ。

となると、もう津波にも、女子供にも解り、津にでも口籠めるといふこととなるのであります。かうして都で流行るものが南大田舎へ戻まつて来て、船屋の店や酒屋の店ではれるやうになり、

めでたくの若松さまよ

彼もさかえて葉もしげる

といった歌謡のやうに、全国的に廣まるのであります。そして、

かけてよいのが衣術に小袖

かけてたもるな うす情

といったやうな味ひの上品なものが、いつか田舎へ行くと、

今の着物は賣わたすき

一夜かけては かけすてに

と、（おかしな）流行り始めてゆくと、初めて文相の精神と服装などが、よく肯定されてゆくのがあります。それが、

いとし服御が野邊にさるならば

涼し風吹け、雨ふるな

となると、庄屋の娘のおもかげが出てくるやうなものであります。夏に、

高い山から谷底見れば

藤原五兵衛は 目にたつ男、

高い山から谷底見れば

お高、可愛いや 有難らす、

高い山から谷底見れば

瓜や茄子の花ざかり

といふ風に変化してゆくのであります。そこに無敵舞伎、馬子唄、盆踊唄と、いろいろに傳承されてゆく経路といふものが見られるのであります。

さまは三日月 宵々ばかり

せめて一夜は有明に、

いとし服御は 三日月さまよ

宵にチラリと見たばかり

十七八は砂山のつゝじ

寝入ると、すれば、ゆり起さるゝ

わしは清松、ねいろと、すれば

磯の小波がゆりおこす

かうなつてゆくのも、當時の時代性といふもので、更に地名とか名物とか、動物、植物は、その土地々々に解りいゝやうに語呂の合ふやうに、自由氣儘に改訂されて唄はれたのであります。

そこに文化發達のリズムがあり、時代々々の様式を備へて、元唄から管唄となり、更に連想でいろ／＼に取材と文詞が置換へられてゆきます。京の歌舞伎でかういふ唄をきいた、かういふものが流行る、お江戸では何々が出来て、何々といふ唄が流行る、それが少しづつ、挿入れられて、女子供の、若衆の、次ぎ次ぎと新しい時代性を生かしてゆく。もちろんそれは昔のことで、今日では殆んどその凡ての着色が時代といふものゝ支配をうけるほど、文化が早く浸透してゆく體となつてゆきました。

明治以來、舊來の民謡はそのまゝで、次ぎ次ぎに新しい俗謡俗曲が出来、それがどしどし流行に次いで消えてゆきます。そして一時はもう民謡といふものを必要としないほど歌謡が幅をきかして、どこの田舎へ行つても地の唄なぞよりも東京大阪で流行るものを唄つてゐたやうであります。それが又最近は、古い民謡は民謡、新しい歌謡は歌謡といふやうに、はつきり區別されて來て、古謡の保存が行はれてゆく傾向のあるのは結構なことでもあります。尤もその間には明治の所謂新體詩人達が、古民謡と小唄をもじつたやうなものを作つたり、更に大正年間になつて、新民謡の創作が叫ばれ、又作品も澤山現はれてくるやうになりましたが、この時代性といふものは、段々に變化し、進歩し、見え隠れに民謡の中に存続して居ります。

それは全く社會の凡ての制度の變化からくるもので、地方が開拓され、鐵道、バスが通るやうになり、都會との交通が繁雜になるにつれて、勢ひ民謡そのものゝテンギも早くなり、又その中に歌はれるところの生活も、だんだん都會化し、人間の感情、戀愛、悲喜ともに骨と變つてまゐります。もうわれ／＼はいかに昔の生活を生活しようとしても出来な

い。凡ては時代の潮に流されてゐるのであります。そこで唯一つの享樂は、古い民謡を唄

86 ひ、古い日本の生活を傳ふことであつて、自然現象——例へば、三ヶ月は、海は、山は、野は、故郷は、母は、戀人は、と懐かしく思ひ出の胸に浮べては、古語を唄ふのみであります。

新民族を志す人は、その過去と現在をはずきりと捉へなければならぬ、内容の感情もさることながら、古來からの日本のよき習俗を失ふことなしに、この複雑した生活を、よい單純な詩型のうちに生かさなければならぬ。將來の郷土民族のむづかしさはこゝにあつて、やゝもするとすぐ過去のものになつてゆく時代性といふものを、いかに巧みに水飯に捉へるかといふことが問題であります。それは芭蕉のいふやうに、流行と不易を併せることでありまして、日本の心、人間の心、その眞の姿を捉へ、時代といふもので粧つてゆくことが藝術であります。佛蘭西の詩人、ヂヤン・コクトオの言葉に「且つて有つたことを、今有つたやうに創り出す」ことでもあります。歌謡は時代性の産物であるが、民族は古いほどよいといつてあるうちに、明日はもう今日の生活が忘れられてゆく、いくら忘れやうとしても忘れぬほど固かな、眞の人間の心を歌はなくてはなりません。つまりこの時代性といふものを通じて、眞の日本の生活を歌ふことでもあります。この土に、この郷土

に、宵寒あり、雨があり、四季がうつり變る限り、われ／＼の母なる大地の魂は失くなることではないのであります。その信念をもつて、ほんたうに人間の心をみつめ、民族の精神を傳承して、これから新民族のため歌かつて行かなければなりません。

民族の藝術形態

民族といふものの始まりは、既に有史以上のもの、わが國では上代からのものであります。その形が獨自なものになつて來たのは「紀記」「萬葉」の歌謡の模倣から、やつと獨立して、國風として認められてから以後のことです。

この點は多くの民族歌謡研究者が、やかましく論ずるところで、まだほんたうにはつきりした研究は發表されてゐないやうであります。土俗學、民族學といふ方面から研究されてゐる人々のいふことと、「紀記」「萬葉」「備前集」「神樂歌」などから、文學として、歌謡の一分野として研究してゐる人のいふことと、この邊で分れるのであります。

87 我はそのいづれへも属くものではありませんが、上代歌謡の藝術的な形を踏襲したもの

88 は、出来るなら民謡と認めたくないのであります。前にも申したやうに、お上品な言葉でつゞられたものも、いつか庶民の國へ交つて来たのでありませうし、又庶民も出来るだけ文學的な歌謡に近づこうとして作つたものもありませうが、さういふ變化がいつともなく巧みに融和されて来て、國風として發達し、更に厚味、情、在郷歌、田舎唄と呼ばれやうになつて、初めて民謡としての獨自性を持つやうになつたのだらうと思ひます。千年前の東歌にもある朝陽歌で、

朝陽けは

鏡心哥が手

今宵かも、霞の霧子が

とりて歌かむ。

といふのは、確かに庶民の語ではなく、智識ある宮廷人の作で、民謡として唄はしたかも知れませんが、恐らく藝術的な風格は庶民には解らなかつたらうと思ひます。更にそれが――

こよろぎの、霞立ちも聞らし

霞ならし、茶摘む
めざしぬちす ぬらす
沖にをれ をれ波。

といふやうな風俗歌にしても、民謡の原形としての、七七五調の基礎と見ることは出来ても、その内容、その歌ひ振りについて見ても、まだ民謡と云はれなかつた時代のものであります。

つまり「歌」と「謡」と「曲」といふものの區別がはつきりしない。上代のものは悉く「歌」であつて、「謡」といつしよにして、歌謡といつてゐますが、古い書を見ると、歌とは言葉の水く引くことの謂であつて、謡とは俚俗のもの、民謡の風調也とし、その間にある、「曲」といふのは委曲に情を盡すをいふとありますから、唄ふことの意味でありませう。これがわが國では、はつきりはしなかつたやうで、和歌としても言葉で發音したものが、文字に記録され、謡といふものも、曲といふものも、皆一つに記されてくると、既に文學として扱はれたので、現今でも歌謡といふ、俚謡といふ、時に民謡といふ言葉も外國語として生れて来たやうな調です。

然しそれはそれとして、ここでははつきり、民間を上代歌謡、中世庶民と区別して、字義通り一般庶民の唄として、時に貴族の、士族のものとして取扱ひますから、よくその語を御理解下さい。さて、上代歌謡から分れ、中世の時代的庶民と唄などと併行して、獨立して行つた民間が、どういふ形跡をとつたか——といふことが問題で、もちろん、三十一文字の形式も真似たでありませうし、其他、祝詞の形、神樂歌の形などを模倣してからやがて二十六文字の定型的な形に落付くまでにはかなりの變化があつたのであります。日本で初めて記録されて、今では庶民の元祖のやうに思はれてゐる。紀の貫之の娘の歌、

鶯よ、などは啼きそ、宜ほしき

小唄やほしき、母やこひしき。

といふのを見ても、名ある歌人の詩として、歌の真似をしたものが、律調の關係から古今集の古美に任せて、律調歌として知られてゐますが、芭蕉もその形を踏んで、

鯛鱈魚を餅にはかりて買ふ人は
賣る人よりもあはれなりけり。

と詠んで居ます。これが俳諧から後句になつた大歌形で、鶯などは、上の句でも獨立し

て一つの俳句になつてゐるのであります。ところが民間唄のものは、もつと自由で、

かたつむり 角だせ

喧嘩があるぞ

(古童謡)

といった風な、形式よりも内容を直接に表現して居ります。これが一般庶民の持つ形式で、禮儀とか、儀式とか、古典に従はず、自由奔放に、心に懸つてゐることを、そのまゝ言葉に投げ出した形であります。それが、

まひまひつぶり

裏に喧嘩がある。

といふ風に、たん／＼律調をもつやうになり、江戸時代には、

まひまひつぶり

湯屋で喧嘩があるから

角だせ 槍だせ

狭輪だしやれ。

といったやうに、すっかり調子が整へられて來て居ります。現今まで流行してゐる狂歌

おけき元祖と謂はれてゐる民間に、

わしや あの殿を

思ひ切りよか、やすくと

といふのがあります。昔の人は今の人が素で話す言葉にも、節をつけて歌つた名残で、かういふ短い句でも、どこか生き／＼として居ります。つまり文學的な飾りのない、純粋とか雑語とか、七むづかしいことを云はないところに、原始民間のよさがありました。それから發達して、だん／＼物に替へて、ものになぞらへて、人に聞かれても成程と思はれるやうに、餘語や洒落を用ゐるやうになつたのは、かなり後のことでもあります。富士の裾野の一本すゝき

いつか袖は出て亂れあふ。

これなどは詩でいふところの敘景的手法であります。つまり愛情とか心の憂さとかを、巧に一本すゝきに替へて明つたのであつて、相應の技巧といふものが解してあります。更に又、

餘所に思ひし昨日のあやめ

今日はわが家の妻となる。

といふ文句をとつて見ても、前半は譬喩に托して、後半や實情を述べてゐるところに、和歌などとは違つた露骨さがあるのであります。それが又、

若い女子に殿御のなはいは

並にしめ緒のないごとく

といふのになると、譬喩と實情とが一つになつて、解り易く思ふところを云つて居ります。それが又、

わしとおまへは諸白手櫛

なかのよいは人知らぬ

といふ風になると、中味がよい、仲がよいと二つの意味を、一つの餘語にこめて洒落てゐるところが、前述の「昨日のあめ」から一步進んだ、譬喩のために云ひ現はしたやうな技巧が見え、更に下の句で打明けてゐるところが、少々ふざけたやうで、これを俳諧などでいふと、パレ句と申し詩的感情からいふと下品になります。然しこの下品さの中にある趣より、古風さ、といったものが、詩にも歌にもない民間の特長で、歌のかけ言葉と同じ

美つて前に述べた「わしや、あの歌を」の題でも、あとの「思ひきらもよか、やすく」とでも、意味が通じますが、技巧をこらすと

山にきる木はたくさんあるが

思ひきる氣は更にない。

といった風に、全く別な態を展開してくるのであります。故に和歌や詩では、他人の歌んだものを勧進すといふことはよくないことにしてありますが、民謡では一向差支えないのであります。

その理由は、詩や和歌は個人の感情で、必ず作者を明記しますが、民謡は歌のものでもないから、昔は作者を記さなかつたのであります。つまり民謡は、多く人に傳はつて唱はれば頌はれるほど、その本来の目的と使命を果すものであつて、高い藝術的な感より平衡な質情を歌ふところに、歌謡としての藝術形態が存在するやうになるからであります。このことをくわしく説明しますと、一人の作者の書いた歌なり詩なりが、長い年月の間にその著作権を失ふやうなもので、失つても猶また、その國民の間に傳つてゐるとし

たら、それはその一作者のものでなく、その國民全體のものとなるのと同じ意味であります。そこで歌や詩は、歌謡の個人的のものであるが、民謡といふものは、初めから一個人のものでなく、その村の、その郷の、その國のものとして、自由に唱つてよいといふことを目的に作りなされるものであります。昔州で出来たら、「昔州の國風」であり、九州で出来たら「筑紫の國風」であります。

その國風として成まつた元唄が、國々へ流れてゆくと、その國々に都合のよいやうに直され、改作されるのであります。現今傳つてゐる民謡の中には、勧進され、改作されて傳はつたまゝ、どうしても元唄の、原形わからない唄がたくさんあります。今、誰でも唄ふところの、

佐波へへと草木もなびく

佐波は心よいか住みよいか、

といふ唄でも、「それが木曾へへ」と「でもよし」、「陸奥へへ」、「でもよか」

「でもよし」でありますが、多くとも原形の本流から遠隔すると、

佐波へへと草木もなびく

といふのは、（？）ではないかといふ事である。木曾でも、（？）とかけてあるところも、（？）の語源の調査で、使役では別に、（？）でもないもので、木曾でも、（？）でもよいわけである。同じこの意味をすぐ簡直して、

相馬くくと木曾もなびく

なびく木曾に花が咲く

となれば、又別な味ひが出るといふもので、今では全く、元明と特明との區別が解らなくなるのも無理であります。大島よしの、

わたしや大島、御神火育ち、

胸に煙はたえやせぬ

といふのも、それ以前の記載に、

・淺間山では、わしやなけれども

胸に煙がたえやせぬ。

といふのが有る相であります。さて、どちらが民族的な味があるかといふと、淺間山

もよいが、唄ふ人の場合が明かでない、そこへ行くと大島のは、いかにも島の娘が唄ひ相だといふことになつて、あの自然と風俗とに巧みに一致するから、この方がよいといふことになります。本當に胸を貸して母屋をとられた形ではありますが、民謡の流れといふものが、あくまでさういふ自然の流れに従つてゐるものであるといふことがお解りのことと思ひます。ですから「二度とゆくまい、何處何處」とか、「何處へよくい」といふ類の文句は、各地にあつて、現在でも「東京よいとこ」でもよし、「四國よいとこ」でも「札幌よいとこ」でも通じる調であります。そこが又、民謡のもつボビラリテ、一般人の、複雑の藝術形態であるといふ理由であります。

それ故に、初め十二字のものもあつたでせうし、十八字、十九字のものもあつた、又三十一字にしたり、もつと長い、もつと物語風のものもあつたと、その文法や措辭を調べるのもよいが、それは學者の仕事に任して、私達はあくまで民謡自由律を主張するものであります。愛詞歌の、

妻ついて、夜妻ついて

お手に豆が 九ッ

九ツの豆見れば

朝風がこひしき

といふのを見ても解るやうに、形式に要められず、云ひたいことだけを云ひきつて、餘韻がなく、自由に切つたり、延ばしたりして唄つたものほど、民謡本来の精神がよく現はれてゐるやうに思へます。

あれ、見さい

筑波の山の横窓

横窓の下こそ

おらが親里

と唄ひ、それが後の二十六字に直したところで、

あれを見なされ、筑波の山の

窓の下こそわしが里

といつては、何となく味がない、調子はよいが、朴な、自然な味が無くなるやうな氣がするのであります。然し民謡の性質として、あくまで郷土の言葉や文化に属するものと、

外へ流れるものがあつて、二十六字のものは調子がよいから、船歌として、馬子唄として、各地へ流れて行つたのでありますから、いかに民謡の旋律の上に、二十六字といふものは、有効で、又唄ひ易いやうに出来てゐるかに感心するばかりであります。

尤も七七五調よりもつと出て、八八八六調といふ琉球の歌謡などを見ると、全く獨特な發達をしてゐたもので、到底、内地の調子では唄へないのであります。それに又、方言、訛りが加はるので、

渡海、隔めても、照る月や一つ

彼女も、眺めよう、今日の空や

といった調子であります。尤もこれは三十字で、明かに内地の和歌三十一字の類似であります。その先の八重山諸島へまゐりますと、實に自由に、のびくと、長短自在で、決して二十六字などの影響をうけてゐないところが愉快であります。一例として、抽調であります。が、「月夜の濱の曲」といふのを示すと

きしの浦の 木綿の花は

月夜の濱を 抱くよに見ゆる

その白木綿の・つくり

木棉棒に、すら／＼かけて

繰りかへしては 繰りかへし

そつと 指先ではちいて見れば

すつきり、綿筋のきよらかな

かぞへ得るやうな 美しさ

ほんのり、吹きとぶ雲のよに

あたらしの手拭織つて

思ふ人をば待つてゐよう。

といふやうな自由律をとり、それでゐて唄ひよいやうに、方言で特別な土音の調律がつけてあるのであります。尤もこれなどは初めから蛇皮縁の曲がついてゐるので、今でも唄はれてゐますが、中世の庶民唄と野の唄たる民謡との巧みな交流が現はれてゐる一例であります。

そこで二十六字のものは、流れる唄、それ以前の元唄は居付く唄——とでも區別されま

すが、どうも二十六字調といふものは、半分以上庶民小唄の匂ひがあるのであります。又そのために諸國の人に聴かれ、記憶されて、各地へ流れて行く力があつたのでありませうが、それ以前の元唄は、動かすことの出来ない郷土に居着つて、國風として残る、その風といふのが、支那の曲にあたるもので、こゝを考へて見ますと、一切の民謡といふものは、曲と共に、或は舞踊と共に出来た——といふことも云ひ得るのであります。

即ち、何かの感動をうけて、唄ひながら踊り出すところに、民謡の起源があると見るのが妥當で、これは蠻人の生活などを見ても肯定されることではありますがそこから進んで勞役の歌になり、庶民唄にもなり、又單純で放歌する唄にもなつたのでありませう。然し現在では古謡の節題しどころか、そのリズムさへ残つてゐないのであります。只、記録された文句についてしか云はれませんが、元唄の起り、そのリズム、その節題しが、おぼろげながらも聴きとれるのは、比較的、元唄とされてゐる勞役の歌、神事の歌などでありませう。

そこまで溯つて考へて見ますと、民謡といふものの性質が、常にある一つの藝術的形態へ向つて努力しながら、然もその一歩前で卑俗に墮してゐることが解るのであります。

言部の歌謡を模倣しようとしても、そこまで技巧が届かない、よし又届いても、さうなると庶民に理解出来ない、出来なければ唄はれないといふことになりますから、勢ひ庶民に解るやうに、単純にしなければなりませんし、内容も卑俗にしなければなりません。そこで民謡に於ける藝術的價值といふものは、単純で、淳朴で、卑俗なものといふことが出来ません。その代りとして、他の歌謡類に見られない、直接法、方言の面白さ、ハマレ調子のリズムといつたものが、その特徴として共に、音楽的にも、舞踏的にも融和して、一種獨特なものになるのであります。

その風格、その味ひ、その聲律といふものは、ここで單に文字に書いては解りませんが、諸君が親しく實際に就いてお聴きになると、合點が行くのであります。大きい白帆を揚げた和船に乗つて、或は舟の茶屋で、古い宿場の旅館屋で、島の漁師の家で、又は山奥の田舎を見たり、木橋、岩窟をしてゐるところで、その人物といひ、今を昔に、昔を今に、感慨深く聴き入ることが出来るのであります。従つて民謡の價値の本質といふものは、文字に書いたり、説明するものでなく、生きて聴くもの、歌調も曲も一つになりきつてその際調の中に躍つてゐる時だ——といふことが出来ます。そこで實際に他の歌謡としても美

しい、古風な味のある文句を聴くとか、更に人情の細致を穿つたやうな歌調を聴いて御覽なさい、なる程民謡の眞髓といふものは故にあるのかとお思ひになるでせう。故に、民謡は唄はれて、初めて生きるのですから、他の記録された文字の藝術とは違つて最高の藝術的批評を下されるものではないが、最大の藝術的感興を催すものだといふことが聞へるのであります。

この點は現在でも、世界おしなべて同じことが云へるので、佛蘭西でも伊太利でもハンガリーでも、又西陲牙でも、南米でも、皆同じやうに古い民謡を持ち、その村々に保存されてゐて、お祭りとか行事があると、聲自慢が唄ひ、それにコーラス隊が加はり、最後に舞踏となつて、唄ひ手も聴き手も共に愉しむのであります。

従つてこの祖先傳來の風俗や方言を保存するためにも、民謡の力は相感に大きく深く、その民族國民にとつて缺くべからざるものでありますから、敢て今日の藝術から見てどうのこののと批判すべきものでなく、むしろ大に愛護して、各自の祖先の息吹き、生活の味を要求すべきであります。

民謡の郷土性

民謡と郷土性——この問題は不即不離のもので、民謡即ち郷土の唄なりといふ定義さへあり、民謡と郷土とは不支律に一致したものであります。譬へその歌に、深い国民性か、民族性とか、或は時代性といふものゝ影がなくとも、郷土性といふものだけはある、それは郷土といふものが民謡を生む母體であるからであります。

剛造のフレイツセンといふ小説家の書いたものに、ある一人の男が郷里を棄て、都會へ出て成功した。するとこの男はいつでも故郷の最後には自分の郷里を讚美する、そしてあんなよい處はないといつて、いつでも故郷を懐しがつてゐる。成功しないうちは、いくら自分の郷土を讚美したところで、誰も人が聞いてくれない、成功した人の口から訊くと、人は所詮さうかと思ふ。それを試してみようか、その男の伴も一人前になると、彼の生れた郷土のことを、親類の通りに自慢する。それなら歸つたらよきさうなものであるが、凡ての財産が都會にあるから、いつまでも都會人として生活してゐる、すると三代目の孫が又

大きくなつて来たが、この男はもう祖父の郷里など自慢しない。生粋の都會兒であるから、親類のいふ郷里のことなど恥しがつて、口にも云はない、そして遂に事業に没落し、青空も何もない狭い穢い建物の四ツ壁の間で、潤々と生活する。人間、郷里を失つた者ほど悲愴なことがあらうか——とフレイツセンは結んでゐます。

それと同じやうに、誰でも故郷といふものは懐しいものです。いかに「ふるさと」は、かへるところにあるまじや」といつても、忘れることの出来ないもので、今日東京に住む人達でも、同じ故郷の人が集まると、必ず話の末には酒でも飲むと國の民謡が出ます。それは他人にとつてはいかにつまらないものでも、故郷を阿じうする人々には懐しく、忘れ難たいものであります。現在私の知つてゐる人でも、小説家の加藤作次郎氏は、酔ふと故郷熊登のチロリ節といふのを唄ひます。田中貢太郎氏は、土佐のよきこい節を唄ひます。人の前ではチープル・スピーチさへやらぬ生原星氏でさへ、仲間が集まると、故郷の山中ぶしをやりまます。

日常は、民謡なんぞくだらぬものがやれるか、書けるか、あれは田舎の卑俗なものだといふ風に處^かけてゐる詩人でさへ、一步藝術意識から離れ、個人として、人間として、その

感情の底を掘ると、むかし懐しい母の懐中を遺棄するやうなもので、いつともなく故郷の唄が唇に浮んでくるのであります。つまり民族はあらゆる人間の子守唄のやうなもので、いかにむづかしいことを受つても、藝術上どうの、社會學上よろしくないといつても、人間の意識生活の範圍にくるものでなく、たゞ感情の世界が生んだもので、直接胸にひびいてくるのであります。民族の位置といふものはそこにあつて、知識や批評を冠せての、わたるべの心、人間の奥底にある夢をゆするとどうの、よるさとの聲であり、又自然の呼吸といふものであります。

昔からでも現在でも、この故郷を主題にした歌はどきどきいものはなく、故郷の唄、思ひ出の唄は無限に續かれて居ります。明治時代有名であつた徳田秋聲の「おすい」といふ民謡調を見ても、

男女あてさへ

筑波の山に

霧がかゝれば

淋しいもの

- 使波の小島の
- 夕波千鳥
- 風やさじかろ
- 彌生さま

といふ風に、おすといふ女が、筑波の麓から、故郷の故郷を懐いて居りてゐる、故郷の心が歌はれて居ります。時口雨情氏の「霧ヶ岳から」といふのにも、

故郷懐しい

あの山陰の

霧は消えても

父母さまを

思ひ出されて

どうもならぬ

と、いふのがあつて、たゞ、故郷へ、

親の在所へ いにたい時は

千里小山も 近う見ゆる。

といつて、故郷と父母を懐しがつてゐますし、又故郷にある者は、鳥も通はぬ山なれど

住めば都よわが里よ

といふやうな気持は、重なる處の庶民が持つてゐた感情で、今日のやうに交通が便利でなかつたので、より郷土に對する愛着愛慕の念が強かつたのであります。そこにだん／＼自負心が起つて来て、

わたしや房州の荒濱育

浪も能いが氣も能い

(房州舊句)

といふ氣になつて、お互ひが意氣を袖へ、他國人にあたらうとする元氣が見えて來ます。そこに勢ひお國自慢が初まるのは當然で「わしが國さで見せたいもの」といつた調子のもので「草津よいとこ、一度はおいで」といふ風なものになり、古い秋田昔唄のやうに「秋田の名物、八森ハタハタ、男鹿では男鹿ぶりこ、龍代味噌、楡山納豆、大館わつはし

といつたやうにならべ立てるし、

合津蟹山、賣の山よ

莖に黄金がなり下る

といふ風に、山とか、河とか、自然の風物を唄ひ、名物を唄ひ、人の氣のよいところ、住みよいところ——といふ風に宣傳もするし、又、その唄によつて、天文時儀を占つたり靈言したりする例もたくさんあります。

ちぎ水鳴海山、鳥の音深い

ざつと夕立くるである。

といふ風に、夏の天候と山の加減を教へるし、下田ぶしなぞでは、

相模灘や東北風よ、石廊崎や、西風よ

間の下田が 出船の風よ

といつて、地理上から風と船の關係を唄つて居りますし、郷土の名所の誇りが伐られやうとすれば、

關の五本松、一本伐りや四本

あとはいられぬ、大分県

といふ風に吹つて、全く想像から受けたやうとした事象をあたたとつと想像する事がある。
ど、庶民はその土地を愛したのであります。
あつて、庶民がその土地を愛したのであります。
郡上八幡出てゆく時は

雨も降らぬに抽し候る (郡上八幡)

といふ風に、愛別のお神に祈りますし、「又」「又」の言を待たせ、「又」の言を待たせ、「又」の言を待たせ、
他で歌附した歌附歌が異なることであつたのであらう

遠州道新 奥いよで候い

貴に車が、二丁たもぬ

とか、

三三三三と通ふ奴は馬鹿ぢや

雪の積ほどある町や (三三三三)

とけなすこともあり、更に歌しつゝのこゝろ

三三三三は大の〇〇〇〇

最後生業、歌つたものゝ、 (中絶)

と書き、あけすけに唄ひ出す。それが地主といふものと、びつたりと一致して、そい
に生活する人々の現実を、直接法に描き出しているのですから、民間といふものは、歌が唄
ひ出すともない、自然の風刺であります。そして又、それが口神となり傳説を生むことも
度々あつて、昔、馬子唄に描かれて、唄は風のやうに四方を吹き廻るのであります。故
に、その唄がどこにでも響て候るやうなら置かれるし、その土地特有のもので、いかんと
もならないものは、土着の古老の口神に水く傳へられ、比較的高人に懸すること、即ち、
神に對する心、父母を想ふ心、能、結核、夢夜、行事といふものが、各地に根を下ろすの
であります。

今日、私達が祖先の生活の片断を偲ぼうとするには、各地を旅行して、その土地の古い
民間を聞くに越したことはありません。昔の山がお城になり、お城が崩れて津波が建ち、
川が埋まり、干潟が變化し、街道にトラフクが走り、町に歌謡のレコードが鳴り響いて
も、まだくその土地の古老の唄の中には、祖先から傳はつたまぼろしと共に、古い言葉
で、古い歌謡して、古いリズムで、民間が唄つてゐるのであります。それを暮の日の唄の

中、夏の涼しい木陰や月の清風で、秋の夜のランソの下、露の夜の園遊会で、ゆつくりと歩くことが出来れば、まるで古い山の神、田の神、土蔵の神といふものが、まだ生きて野山を歩いてゐられた頃からの、土に生れた米の産たるわれ／＼の祖先の、苦しい勞役、働しい實り、そして若々しい體、醜取り、盆や正月の行事、そして又土に産り、その子、その孫と、同じ土の上に家を築き、又同じやうに長い月日を送つて、泣いたり、笑つたりして、又死んでゆくところの故郷、その草の匂ひ、木の色、日や月や星や、風や雨や、さまざまの自然の模様といつたものが、その心の奥底から送つてくるやうに思へるのであります。

知らぬ他國へ行つて、知らぬ人の故郷へ行つても、私達にはその時剛ふるやうな聲、草に風が吹くやうな響きも、山や河を渡れて来たやうなりズムが身にしみて、思はずほろりとするのであります。そしてわれ／＼の祖先の生活が、おぼろげながらも浮んで来て、ものゝ味にも、酒の匂ひや、女子供の體の中にも、現在までつゞいてゐるところの人間性といふものゝ聲響心が、涙ぐましくも思ひ合はされ、なつかしの故郷、慕はしの母の懐中へ歸つたやうな、深い哀愁を感じるのであります。これが土の味ひです、郷土と民謡の家

園氣であります。

もう何年か前のことですが、私の故郷の神奈川縣、奥に相模野地方に歸つてゐる妻打唄を聴きたいと思つて、藤澤へゆき、平塚へゆき、厚木へ行き、大磯へ行き、土地の人や唄者を尋ねても、もう既に完全に唄へる人はありませんでした。そこですつかり失望して、三四年経つてから、偶然に栗野の山奥へ遊びに行き、大きい農家に泊つてその話をすると、もう水いこと病床にゐるその老母が、お望みならといつて唄つてくれました。老母はもう八十を過ぎてゐました、大分弱つてゐました、氣の毒とは思ひましたが、ちつと聴いてゐると、徐々に唄ひ初めて、一つ二つと唄つてゆくうちに、老母の顔はや、紅みを帯び、何かかう若い時代の夢を見るやうにのび上つて来て、いつか聲も若やき、すら／＼といひ聲で、妻打の調子を真似るリズムで唄つてくれたのは、すつかり此方が感激してしまひました。そしてもう一つ／＼と、十ばかり唄ひ終ると、あゝ後しかつたといふやうに、すつかり疲れて眠つてしまひました。それから一週間もして、老母は枯木の朽るやうに死んだといふことをきました。私の胸には今でもその響びた、六月の頃の田舎の、妻の匂ひがするやうに、若々しい老母の聲が聴つて居ります。

現在でも、私の母の郷里である川崎の國會へ行きますと、歸郷の晩には村人が集まつて来て「お背戸よし」といふのを唄ひます。

お背戸にお蔵が、七戸崎

七戸崎の お蔵よりも

親がたいせつ たいせつ、

といふ文句で初まりますが、十二時を過ぎ、夜が明けても唄つてゐるのには驚きます。その聲の主を見ると、日常はあまり人と口をきかない、津村鎮まる百姓で、多少でも町の繁華に参まり、歌謡を口誦むやうな男には、古い調子が出て来ません、このことは實にはつきりと云はれることで、畑の中に、風の中に唄いて、一生土に埋もれてゆく人間でない、三味線にも笛にもろぬこの「お背戸よし」の調子は出ないのであります。

更にこの七八年は、私もすつかり古い民謡のファンになつて、水戸驛へ行つて、磯よしを聴き、潮来へ行つて、潮来よし、朝馬中村へ行つて、朝馬よし、仙臺で豊後よし、石の巻で、からめよし、兩館で江邊道分、秋田であはこ、佐賀と新潟で、おけさ、富山の歌見て、おはらよし、豊後よし、山代で山中よし、更に關西では、安来でも博多でも、高知

でも、鹿児島でも、熊本でも、いろいろとその土地の民謡をき、ましたが、三味も太鼓もないものを、無理に産聲唄にしてしまつて、東京の大島よしやおけさよしのやうに、誰の耳にも解るやうになつたのは感心しませんでした。それよりも山の中の、鳥の巢での、土地の者が胸かに唄ふものゝみが聴きたいのです。

そこへ行くと、琉球といふ島々は、まるで民謡の寶庫のやうなもので、ほんたうに歌の島であります。村をマギリといつて、各マギリマギリに一つや二つの唄があります。尤も方言と語りで、最初は何の意味やらとりつく島もありませんが、一ヶ月くらゐ馴れてくるとその歌詞も解り、又曲の差異がはつきりして来て百年、三百年の前のものが、ありのままに聴かれます。それがどこやら東北地方と似てゐますが、東北の語りよりも更に稚氣があつて、乙女を、イヤラビ、月をツケ、航海をトカイ、茶刺花をムイクラ、太陽をナゲなどといつて、妙な動詞を持ちながら、巧妙に韻の順などを歌つてゐるところは、一寸内地の民謡に見られないほど進んで居ります。

三味線の原形である蛇皮線は、サンシシといつてどこの家にも一錠ぐらゐるはあり、男も四十過ぎたやうな人は、必ずこれを弾きますし、女は唄ひます。島々は真島音で、生活は

86 苦しいのに、そんな遊園ではいけないと云はれて居りますが、島の人には苦しいからせめて
唄で苦勞を忘れるのであります。そこに切々たる真情が唄はれ、いづこも無情といったや
うな、諦めのある淋しい、やるせないノロヂーがついて居ります。

一つ一つ實例をあげますと、何百と限りないから、それは那覇市で發行されてゐる「琉
歌集」とか、郷土研究社から出てゐる「八重山民謡集」などを参照して貰ふことにして、
こゝに琉球本土のものを少しあげると、

若夏になれば 心うかざれて

熱水に下りて 髪洗ふ

おしつれて沙花くみとのゆる桶に

照る月やひとつ影やふたつ

レロドン長濱に うちやい引く浪の

レロドン乙女の日笑れ齒ぐき

阿且葉の月や圓々と照ゆる

よそ目まとはかで忍のでたばれ

生別れだいなすかにかくに苦しや

嵐聲のあらば我身は消しゆが

少々發音に苦しみますが、初めのは乙女の唄で、初夏になつたら、清い泉へ下りて髪を
洗はうといふほどのこと、次のは大勢して沙を洗む桶に月が一つ、影が二つうつつてゐる
といふだけ、一番目のは、レロドンといふ地名、その長い濱に、ちやぶ／＼と打込んで
くる白浪は、そのレロドンの乙女達のにつこり笑つた齒ならびのやうだ、といふ意味、こ
れなどは一寸と内地に見ない譬喩であります。次のは名物の阿且葉に丸い月が照つてゐま
すから、餘所へ行き迷はないで、忍んで来てくれといふこと、最後のは少し悲愴で、生別
れであるからこのやうにもわが身は苦しい、もし嵐が吹いて來たらこの身は消えさうだと
いふこと、「玉の輪のたえなば絶えね」といつた境地で、島の遊女の心持などが眞剣に唄
はれて居ります。それから先へ行つて、臺灣近くの八重山諸島のものは、前編にも一つ舉

げたやうに、到底眼背では記せませんから、拙い脚を三つ示しませう。故に「曲」の曲」といふのがありますが、もちろん地名で、そこに生れて育つたイマラといふ娘と、妹のユプリといふ美人を唄つたものです。

くいでしゆくの曲

くいでしゆくの、イマラに

妹の、ユプリに

イマラに ふれたや

ユプリに ふれたや

御車はいかゞ イマラよ

御はお好きか ユプリよ

いやく 御車は山の葉つばぢやないの
いやく 娘もたゞ車のぢやないの

あの かはゆい新身の肌なら

あの うれしい匂ひのはだなら

手さきへでも ちよつと

指先へでも ちよつと

といった風に、必ず記憶し易いやうに、對句で出来てゐるところに特徴があります。そして単俗であるが明るい若々しい気分がありますし、南國のことですから、昔は野生の御車もあつたでせう（勿論現在もありません）さういつた軽い気分で、二人の美人によびかけた唄です。次は「しびらばなの曲」といふので、風平の娘、といふ島の一境、に新しい道路が出来た、それを祝つて、村の主役たる琉球本土の官吏を歓迎した唄で

しびらばなの曲

しびらばなの新しい路から
目出度い、路から

どこの王者を頼かうか、
どんな領主のお供しようか

わね／＼の鳥の背人を頼かうよ
村の主役の お供しようよ

いとしい乙女は側から
きれいな乙女がしらは後から

片手で酌とり
片手で首〇き

酌とりの、綺麗なことよ
首〇きの、いとしいことよ

寝までも うつくしく
寝間までも うるはしく

今宵の 明くるまで
ながき夜の 更くるまで

煙草吹きく 話したまへ

無のみく 隠りたまへ

といふのでありますが、いかにものんびりした島人の有様が窺はれるのであります。次にもう一つだけ挙げますが、これは少し悲しい事實を歌つたもので、琉球王の奇蹟によつて、生れ故郷の竹富島といふ島から、遙か南の西表島のサカマといふ所へ開墾に行つた、マザカイといふ男を歌つたものです。

まさかいの曲

竹富島に、生れ

サカマへ行つた

マザカイよ

どうした、わけて
いかなる ゆまで

サカマへ 住つたか

大浦田の 港口の耕地に

真白い米と

餅になる米を穫らうとて

あゝ、古見嶽の 八重嶽の、その上に

三日月のやうな、若い月が出たならば

三日月ちやと思ふな、若い月ちやと思ふな
俺ちやと思へおまへの愛する

マザカイちやと思へ

おマザカイよ、竹富島の

神話のその上に

白雲の、のり雲の 立つならば

白雲の のり雲と眺めずに

乙女ちや、あなたの戀人ちやと思ふてよ

琉球も八重山も 照り榮えたまへ

若い三月月

唄にうたはれ 曲に詠まれた マザカイ

といふので、知らぬ孤島へ重ひやられて、せつせと開聲してゐる若者マザカイの孤獨と、その戀人の島乙女を後の人が歌つたものであります。

さういふ生活、又は傳説などを拾つて歩いたら、全國至るところに、無限の民謡があるやせうが、實例は先づこの位にして、唯、民謡そのものがどこから發生したか、どうして唄はれるか、といふ経路を示したまでではありません。

要するに民謡とは、かくの如くその郷土郷土のものであります。そしていつか亡びゆくにしても、歴史の陰にある庶民の生活、その感情、その云ふに云はれぬ心を代辨したものであるといふことがお解りです。従つてそこに出てくる単俗性、通俗性といふものは、萬人の胸に直接ひびくやうに、わざと云ひたいほど、自然に表現されてゐるものであります。その點、民謡を低級なものとする高踏派の詩人などといふものは、己れの人間性、おのれの郷土性を忘れた、象牙の塔のミイラであつて、生れた人間の、否、民族として人類の、永遠に輪々としてつゞく感情の流れ、その淳朴な、自然な、生存の内容といふものを知らない者であります。

民謡はあくまで土です、郷土です。そしてそこから生れた人間性の奥底の聲であつて、風の、浪の、雲の、空気の、花のひびきや匂ひや姿を借りて、やさしく、單純に表現した詩であります。そこにはむづかしい議論はいりません、唯その質朴な言葉、ハヤシ、それさへ豊しく自然に唄はれたなら、本来の目的を果したものであります。

民謡と生活思想

前項に於ては、民謡はその郷土が母體であるといふことを力説しましたが、こゝではもう一步深くはいつて、その郷土を中心、乃至背景にしたものゝ内容、即ちその質としての生活思想といふことを検討して見ることにしませう。

更に前に挙げたやうに、民謡が庶民の生活にいかにか密着なものであつたか、生活そのものが直ぐに民謡になつた例として、農事の歌、工事の歌、その他の労働の歌を引合ひに出しましたが、譬へば軍歌に唄はれたものを、又軍歌に唄ふこともあるし、白挽歌としてゐるものを軍歌に唄ふ場合もあることで、その逆もしやテンギは違つて、配値されぬ、おもしろい唄である場合は、何んにでも唄はれるものです。それは歌詞一つに係ることで、特に田植のことなら田植の時、桑摘のことなら桑摘みに限られることもありませうが、何んにでも通ずる文句ならば、何の場合でも何の節回しにでも通用出来を謂てあります。従つて古い民謡を見ますと、甲の地で田植歌に唄はれた文句が、乙の地で軍歌に唄

はれ編入されてゐる場合などがよくあります。

そこで民謡の形態の變遷から一步出て、その中に唄はれてゐる生活風俗、及その思想といつたものを取上げ、これによつてわれわれの祖先の生活を傳ふのも、亦研究の一端であります。昔は民謡がいかにか水い間唄にかこつけてその生活を隠してゐたか、然も自然の人情の流露と相俟つて、共に喜び、共に悲しむ、又共に泣き悲しんだか、古い民謡を見るに、それが劇的にも小説にもよく寫はれるやうなものが澤山あります。徳川朝の泰平な御代から、藩閥にはよく唄喧嘩といふものが流行しました。現在でも古い片田舎へ行くと、お盆などに村と村の子供達が、双方で悪口を唄ひ合つたりしますが、悪口あたりでも博打といつて、勝負などに双方から掛合ひに唄ひ、古い唄から新しい即興唄まで唄つて、唄が盡きた方が負けといつた風俗が残つて居ります。會津に残つてゐる「げんじよぶし」は一名唄喧嘩と云はれる相で、甲と乙とが交互に唄ひ、古いものから新作の唄、善唄、もじり唄まで唄つて、盡きたら負けといふことになるので、その選手となる唄ひ手は日頃からいろ／＼と練習したり、御興で尻とり唄のやうなものまでやる相であります。その唄喧嘩がまだ明治の頃まで残つてゐて、男湯と女湯で盛んに掛合ひ残つたといふ話です。元唄

が特選となり、そのもじりとなつて傳はるのはかういふ場合で、維新前まで湯澤といふ所に、おそめといふ女がゐて、聲もよく頭智もあり、誰をも引ひ負かしたので、今でも唄喧嘩の上手な人をおそめのやうだといふ話です。ある時旅の男がこのおそめを引ひ負かさうとして「湯澤おそめは利發な者よ、石で巾着渡つてけろ」と唄ふと、おそめは即興で「石で巾着渡ふてもやろが、砂のカキ鉢よつてけろ」と返したといふことが、民謡辭典に出てゐます、又諸國の盆踊唄などを見ても、何處々々へは嫁に行くな、貧乏暮しだとか、何處其處の人間は愚者だといふ風に、双方で罵りあふのがよくあります。それから處の名物や自慢になり、嫁姑のことから、思ひ逢ひ、女狂ひ、成はぬの唄、涙の唄、生活の苦悶といったものが唄はれて行きます。

竹に擧げた子守の唄とか、田草取の苦痛とか、新調の幸さなどから、木挽唄などにも、木挽女房になるなや妹

花の盛りを山小屋に

といふのと、後の句「しんの野山にたゞ一人」といふのとありますが、これなども木挽生活の佻びしさがよく現はれて居ります。又よく人に知られてゐる文句に

娘かはいや白面で身持ち

聞けば男は旅の人

といふのなどがありますが、これも肉情的な口吻で、洵に一練の人情をよく穿つてあるのに感心致します。然し更に全國へ廣まつてゐるのは「十七よし」といふのであります、古くは十三舞舞とか、十六御花といつたやうな婦女讚美のものもありますが、主として女の最も美しく發育するのは十七頃らしく（今では數へ年の十八ですが）琉球の唄などにも、内地の「お月さまいくつ、十三七」の轉唄らしく、

月の美しや十日三日

乙女美しや十七

といふのがあります。つまり月の美しいのは十三夜、乙女の美しいのは十七、といふので、愛知縣の「十六囃り」にも

今年ア十六 まゝけの年よ

誰に頼まじよか、初なりを

といふのがありますが、佐渡の古唄、

十七は つやだ

竹に油を塗るやうだ。

といふのが、いかにも適切で、十七ぶしが全国を風靡させたのも、亦むりからぬ人情と云はなければなりません。

十七が、御の下で布さらし、布晒し

晒した布こそ、白うござる

十七が、朝川わたる、かはいさよ

わが子、妻なら、負ふてわたさん

などは、いかにも明るく楽しいもので、かういふものになると、民謡の直感的な人情の豊饒が、他の歌謡類とは違つて、いかに一般的であるか、いつの時代でも「乙女十七」はよいものであることが解ります。この歌は世界各國の民謡も同じで、獨り日本ばかりではありません。

次に最も親につくのが、自然とか、神佛といつたものよりも、より直接で教化的である父母の恩、親への愛といふものがよく現はれて居ります。

朝は起きては、親さま拜め

親にまさりし神はない。

これは親であると同時に神親で、皇國の神にも通じるものであつて、

後世を願はゞ、親さま願へ、

親にまさつた願はない。

といふ風に、佛よりも尊いものとしてあるところが、淳朴な時代の教へで、

妻はありや持つ、無ければ持たず

父母は、神の風守り

となつて、祖先崇拜の孝道を説き、家族本位の倫理が明はれて居ります。そして、

神親と、月日は いつもよし、

月日と、神親と、いつもよし、

といふ歌は、親子の道を説き、はつきりと現はれて来たのであります。それと同時に、いふことは親から見たわが子、つまり我が親の愛といふものは世界的のもので、蠻人の世界にも傳れた子守唄がありますが、日本にもわが親可愛いの子守唄は、現在でも山ほど残つて

居ります。附屬も知らされてゐる「ねんねのお守りほどこへいた」といふ長篇のものから、よく附屬の調つた巻頭がいくつもあつて、各地によつて又方言で唄はれて居ります。然しこれは、重層の部分ですから、くわしいことはその方へ譲つて、民間調の上から見ると唄は子といふて、奪ねもするが

唄を奪ねる、子はまれな。

といふ風に批判もありますが、一概にさうとは云はれません。多少事實であらうと思ひます。然し又、奪そのものといふやうな、調をしぼるものも稀ではありません。

奪ては奪唄を、しぼるとまゝよ

唄に奪唄は居るまい。

といふやうな、いぢらしい子の愛が沁み出てるのも澤山あるのです。

然し何といつても、大勢で合唱したり、重層で唄ふものは、明るい美文的なもの、神や、自然や、幸福や、感謝が唄はれて居りますが、奪唄の唄になると、節歌でも馬子歌でも、又金細歌、酒造歌でも、もつと小人数の未婚歌、臼杵歌、草刈歌、納米歌などは、どこか個人的な、うすら悲しい旋律やその奪唄が、しみるくと哀調を帯びたりリズムと共に唄は

れます。

尤もその環境がばつと明るい、朝刈歌や、夜打唄、田打唄、茶摘歌といったものは、自然と人情の微妙な味がありますが、然し多くの歌調の中には、一般百姓の、庶民の、更に小さい家庭の、夫婦の——といった事情や心持が唄はれて來ます。職業となれば離しも自分のしてゐることが、人に較べてあまりよいとは思ひませんし、飽きてくるから、つい愚痴になるのでせう。慰助の歌にしても、唄を聴く娘の心にしても、更に木挽や漁夫や金細や、辛い労働を取へてしてゐる者にとつては、せめて唄で日常の鬱憤を洩らすといふこともありませう。

佐波の金山、この世の地獄

登る梯子は つるぎ山

鳥取場漁師は、乞食に考る

乞食ア夜寝て 喪障ぐ。

などは、全く佐波の金細唄夫や、夜の鳥取場漁夫の辛苦そのままでありませう。又、「糸

今年ア十三、糸取り習ふて

糸が細うなうて苦勞する

といった女工さんの感嘆もありませうし、

白指れ、粉指れ

それが嫌なら、顔刺れ、

といふやうな、百姓生活の辛苦も出て来ます。さうかといつて、百姓や家業を棄て、他國へ出奔したところで、なか／＼成功せず、泣く泣く年老いて故郷へかへるとか、乞食をするとか、そこに非知識階級の一生が、悲しく嘆はれてゐるものも澤山あります。

更にそこから又一步はいつて、家産生活といふものを見ると、幸福で平凡な生活なら別に取立て、いふほどの事もないが、少しく不仕合せといふやうになると、その悲しみや感傷や等ひが、ぞく／＼と出てくるものです。馬場はその庶民の消息や涙を代表して、樂隊も何もない、そのまゝの聲で、靜かに嘆ひます。先づ、人生の一大戦役の結末といった主眼から調べても、

顔の前まで、相知れました

早く買ひを、たてゝくれ

といふやうに、双思の仲が親に知れ、すぐ話が纏るとよいが、

買ひたてゝも、くれない時は

逃げてくる氣に、なりやしやんせ

となると、事がめんどうになります。然し又一方が落着いてゐて、

待てば添はれる、身を持ちながら

せめて世間の笑ひ草

と意見する場合、一方更にせき立てゝ、何でもいふことになり、

たとへ今日添ふて、明日離れよと

立つた浮名の、意地ぢやもの、

といふ風に、押して来られると困りものであります。然し又女の方が分別があつて、

とても大男で、添はれぬならば

思ひきりまじよ、洩いうち

といふ風にあきらめるとよいのですが、**石が噴きま**りよか、油が飲みよか、**雄な男に**嫁はれよか。

雄な男に嫁はれよか。

となると、殆ど絶望であります。然しそこを又よく聞きわけて、**嫁**だけでも、**親**には勝てぬ

さればゆきましょ、**末**に。

と云へば圓滿解決となつて、**高砂**國海軍軍医やかに——となるのであります。かうして**親**の祖先は、その遺徳に従つて結婚し、母となり、**親**母となり、その子が又同じことを繰り返す。人情のために生きて来た、そこには全く**親**と**子**といふほどのものもなく、**親**はで心中となり、**子**も**親**となり、それは**親**の**子**であり、**子**の**親**でもあります。二人がやつと結婚して、うれしい事を見ようとする、そこへ**結**といふものが登場するから、**家**の中はむづかしくなります。

いとわが子も、**親**とりや情い

親は**親**生の**親**やら。

となつて、世間によくある**親**いびりとなり、何でも**親**に**子**の**親**を云ひ附けて、**夜**も**夜**もおら休ませない、そこで**親**はひとりほろりと涙しながら、

親たい、**親**むたい、**親**たなら、よかろ

親の**親**なら、**親**せもしよに

と**親**むことになりますが、心ある**親**ならば、又考へ直して、**た**と**結**が**親**でも**結**でも

親を育てた **親**ちやもの

といふ氣で仕へればよし、**夫**を**大**事と**結**ひつけて、

親も**親**も **他人**の中に

情あるもの、**親**ばかり。

といつて自ら**親**め、どんな辛い仕事でも**親**はわやうな氣になります、**親**に**子**の**親**があつて、

娘にや手桶、前の川

娘にや松本桶で、沢の水

といふ風に、水を流むにも區別するやうになると、子姑といふものが、又怒めしくなります。

姑、子姑は皆朱のお話

娘は下座で、飯折敷

と、全くの虐待が始まります。そこで貴閨の人が同情して、

沙袋でいらんもの、蛋に杖に風

それに續いて 娘子姑

と唄ひ囃すのであります。然しさういふ花嫁時代が過ぎ、子も深山山出来て、一家の主婦となると、老いぼけた姑に遠慮して行くやうになり

那ふて八年、子のある仲だ

娘に杓子を渡しやんせ

といつて、家内中で一番女の権力であるところ、飯盛杓子を姑の手から奪はうとする戦

が始まります。そこで老いては子に従へと大人しく引込めばよい、が頑固な姑になると、年が寄つても喝破しても

娘に杓子が渡されぬ

といつて、あくまで一家中の飯盛を担へ、一人で背に飯を盛つてやるといふ役を譲りません。さうなると夫に對しても、

可愛い／＼は、子のないさきよ

今ちや娘より子が可愛い

思案なかばで、この子が出来た

娘は異なもの、子でつなく、

といふ調子で、わが子の愛に盡かされて、たうとう一生我慢するやうになるし、夫もまた今更のやうに、

おら娘、をんな

おれが男で、仕合せだ。

といったやうな、今更どうにもならない現實の前に、屈服してしまひ、人のよい父となります。然し又それが、どうにも開き出さないとなると、一朝にして百年の學女房も別離といふことになります。

一生束代居るやうに思ふて

精木しました、明々に

精はこの家を死場と定めて、庭の隅々にも来る春は精木したのに、今去られようとは夢にも思はなかつた。その女ごころの切なさに、

縁の切れはに、この子が出来た

子にも泣かせ、わしも泣く

といった悲劇となつてゆくのであります。それも又いつか復讐が出来たらよいが、夫に執着に女などがあつて、

女房出してやれ、子は呉れさんし

あとの後継に、わしになる。

なんといふ不心得の女がとび出しますと、夫も大變です、更にそれが南蛮女でもあつ

て、仇つばい年増となると、

度胸定めて後継さんせ

十九や二十の身ではない

といふ風に感ぜられるやうになります。まアこんな風に想像してゆくと、かういふ風俗的なものは深山あつて、まるで芝居を地で見るとやうであります。こゝに民族としての重みがあるのです。それは誰にもわかる人情です。そして尤もなことのみにです。この世間常識、この生活感情といふものが、誤りも無い民族の本音でありまして、それを宮野の花にも富士の雪にも響へてゐないところが、庶民叫と違つて、人間の生地のままの響といつてもよいところあります。

然し何といつても、感情が動詞としてゐる若い内の心は、亦民族の真髓そのもので、若い男女の心は躍るやうになるのは無理ありません。

昔國とる夢に、愛結ふてとらせ

秋のあ月の輪のなりに、

明るい黄金色の朝の十五夜、その下下書き部落の人々は、古式に従つて語り明かすので

あります。

おけさ踊るなら品よく踊れ

品のよい舞を舞にとる

野でも山でも舞でも舞でも

唄で舞げば音にやならぬ

踊りや踊りたし音の子は泣くし

この子泣かせて踊らりよが、

舞ふたくよ踊子が舞ふた

朝の内緒よりよく舞ふた

唄ふもの、踊る者、囃すものと、大空の下に出て歌謡をつくします。歌謡には歴史また四五百年だといふことでありますが、よく愛國へ行き渡つて、現在でも囃々と復活されるやうになりました。

舞名立つは、二十うらそと二十三

眞實、此の舞の調が出にや響た。

(佐渡古謡)

かうして若い人々の戀愛が始まります。野原で逢つたり、思ひあつたり、その若いうちこそ百姓達にとつては、一生一度の美しい時であります。結婚して世帯を持つやうになると、世の中は苦しくなります。これは今日の私達にとつても同じことではありますが、昔の人の戀といふものは、露骨でもあつたでせうが純情なもので、殊に和歌や芝居や物語と違つて、民話に唄はれた戀愛は、一層懐かしい感じが致します。

殿が買ふてくれたこの鏡

こころ變らば影くもれ

逢ふて山々踏ろとすれど

逢へばうれしうて踏られぬ

逢ふて語りた小松の下で

松の葉のよにこま／＼と

かういつた純な鏡こころといふものは、先づ人生の寶玉的價値といつてもよい位で、無

ない生地のものでもあります。こゝには個人としてのものではなく、百人の、千人の、萬人の情がある、つまり複数の、低いけれども大きい深い生存があるのであります。

民謡は決して一人の英雄の、才媛の、美男美女の、俠骨の、義人のといったものではない、むしろ何もない僻村の一卒兵衛の、その仲の、隣の娘の、外を通る馬子の、旅人のものといつてもよいのであります。従つてそこに表現された生活といふものは、平凡な、ありきたりのもので、その人情も低俗であり、又強ひて取立て、云々するほどのものではないのであります。

それが亦民謡の長所でもあり價値でもありまして、歌人や詩人が強ひて書かうとしても書けない、むしろ詩も歌も知らない素人が、唯眞實に感じたことを口に出したといふやうな、古拙さ、稚といつて作者のはつきりしないもの、一人から二人、二人が四人と口傳へに廣まつたもので、なか／＼元叫といふものを採すには困難であります。

今日の私達は、唯かういふ古い民謡を探し出して、幽かにその生活を偲び、思想を探るのでありますが、それは全く日本の過去の社會情勢そのままのものでありまして、民族としての自覚、文化史としての價値、さういふものは影を遺し、唯、教師自然の恐怖、親子

の愛、戀の眞情、盟詞、誓言、愚痴、愚直、愚訴といったやうなものゝみを見見します。つまりそこには智的生活といふものがなく、單に人情世界があつたばかりであります。従つて教訓とか、警諭とか、理論とかはあつても、ごく平易なもので、亦平易でなければ民謡とはならないのでありますから、その根本はやはり佛教の無常感から來た「もの哀れ」に盡きるのであります。

生れ育ち、離して、親となり母となり、幾代も同じことを續けてゆく庶民の運命そのものを、感情のままに叫び出したのが民謡であつて、強ひて作つたものでないといふことが解つてくるのであります。それは生活の記録ではなく、生活の消息であり、喜びであり、悲しみであります。故にその根本思想といふものは、當時の社會情勢そのままのもので、これを批評するとなると、一個の社會史になりますから、先づこの邊で止めて置きますが、要するに民謡は、過去の人々の生活だ、その聲だつた——といふより外にないのであります。

現代民謡に就いて

現代に於ける民謡集といふもの、出版は、明治三十八年三月出た野口雨情の「結草」といふのが嚆矢で、雑誌に發表されたものでは明治二十四年の「國民の友」に載つた中西梅子の「浦のとまや」が最初だつたといふことでありますが、これは全く民謡を詩の一部門として、民謡體を假して詩を發表したものと見るべきであります。つまり民謡といふ形體なりその純粋性、素材性を借り來り、民謡を詩にまで高めようとする動機でありました。そしてその野調の中にも本詩を發見したものと謂つてもよいのであります。

古く民謡といふものは、大抵編纂したものばかりで、明治七年に馬山樵夫といふ人の集めた「雄雞風俗歌」同じく八年に南山といふ人の編した「山家鳥蟲歌」などがありますが、伊賀の油屋三左衛門といふ人は「白鶴歌」、鹽屋彌助は「鶴鳴歌」などといふものを出版したとありますが、多くの記録は大抵小唄調とともに編纂したもので、まだはつきり民謡調といふもの、體裁がなかつたのであります。もしあつたとしたらそれは單に田舎唄、在郷唄であつたからでありました。

何しろ徳川末期の世相といふものは、諸君も御存じの通りのものでありますから、一時的な俗謡、はやり唄は澤山出ましたが、ほんたうに郷土に落着いたよいものは出なかつ

たのであります。尤も元祿以降、世の中がだんだん開けて、歌謡音楽が盛んになつて來た結果、人々はどうしても都會的な座敷唄、長唄、淨瑠璃、小唄といった方面へ走つたのでせう。演劇もある。仕舞もある、狂言もある、長唄、常磐津、清元、そのほか河東とか能中とか、琵琶、琴曲、あらゆる樂器が發達して來たので土良の野生のまゝの田舎唄でさへ、太鼓や笛を入れる、少し洒落者があると三味線を入れるといふ風になつて來ましたから、素のまゝで唄ふものは、船の上か、畑か、山か、ほんの一部分に限られるやうな勢ひになつたのです。

それが更に明治になると、黒船騒ぎから急に西洋の文明を容れることになつて、電信、電話、電燈、瓦斯、汽車、汽船といふことになつて來ましたから、そんな泥くさい野趣のあるものは、だん／＼人中で唄へなくなつたのでせう。そこへつけ込んで現はれたのが、明治以來の流行歌であります。然もそれに三味線がつき、月琴がつき、西洋渡來の樂器の伴奏がつくといふ勢ひですから、百姓がばんやり素のまゝ唄ふ唄などといふものは、一氣に吹き消されてしまつたのも道理であります。人々は騒然としてこの俗謡たる新曲へとびついて行つたのであります。どんな片田舎へ行つても、若衆などが最初に仕入れて來て、

現在のレコード歌謡のやうに唄ひ廻したものであります。そこで三味線やその他の樂器の調子にのるものなら、安楽ぶしや、慶ぶしのやうに再び世の中へ現はれるが、どうにも樂器にのらない節廻しやチャンポの廻いものは、自然人に「囃」られなくなつてしまつたものです。つまり激しい古謡受難時代といふものがやつて来たのであります。

世間は物質的に明るくなりました。それが爲めに下品な俗謡流行歌はいくらでも唄はれるが、眞に郷土の先祖から傳へられたものは、暗い野山の隅へ忘れ去られたのであります。今まではお國風として、各地の郷土から傳はつて行つたものが、こんどは流行歌として都會から田舎へ流れて行きます。人々はランプを買ひ、マントを着ると同じやうに、この流行歌を仕入れたものですから、餘程の衝動な人でないと、古い唄を唄はなくなつたのであります。かうして全く民謡といふものは絶え、新しいものが生れなくなつてしまつたのですから、その文化の社會情勢といふものは恐ろしいものであります。

その代りといふほどの自覚もなかつたでせうが、やつぱり古謡を受したのは詩人で、自作の中にその簡潔で素朴な形跡を取入れ、詩としてこれを創作し初めたのです。尤も「浦のとまや」は純然たる民謡調でなく、むしろ小唄めいたもので、

浦の とまやの あげぼの ゆかし
白く 鷗を 染め 抜いて

浦の とまやの あげぼの ゆかし
囃馴れ松風 さつさつと

浦の とまやの あげぼの ゆかし
ほそく 胸かに 鐘の聲。

といふのでありますが、そこには知識階級の歌謡の匂ひが多分にあつたのでした。第一百姓には「ゆかし」といふ意味など解らないのは當然であります。これはむしろ琴唄でありませう。然し明治以降詩人の手によつて成されて来た民謡調の復古はこゝから啼まれて行つたのであります。

同じ頃、山田美妙、齋藤緑雨などの手によつて、やゝ民謡體をなしたものが創作されましたが、然しどつちかと云へば小唄や端唄といった匂ひが多かつたものです。俳人で有名

な正岡子規もこの頃に俳諧の調子を離して「櫻年の歌」といふのを發表しました。

車に載れば 七車

舟に載すれば この舟

さつさ 船舟 船車

動かにや 船脚も 押しに來い

戻たきや そこからへ うち捨てろ

豊年ぢや 満作ぢや。

といった調子のもものが三聯づついたらなのですが、その後は絶えてこの方面に力を盡さなかつたと見えて、そのまゝに打消えた形でありました。

その後十年間、明治三十年から四十年へかけて、詩壇が盛んになるにつれ、藤村、龍翠、泣菫、有明といった人々が續出し、俳諧の「明星」派、隨筆の「文壇派」などが對立し、皮肉、清白、白秋、曉村、といふやうな人々が乗出して來ました。こゝに泣菫の「船屋の女房」といふ短いものを擧げて見ますが、

野こえ、山こえ、春こえて

京へと問へば 蘭三屋

船屋の女房笑顔よく

眉毛うちふり道を説く

といふので、猶どこやらむづかしい詩人の見た世帯の味であります。又、有明の「木曾少女」といふのを引用して見ますと、

歸る今こそ

来たをりよりも

花の散そへ

木曾少女

山のふかさや

情の人の

かけた笠の

水もよい

おろく柄かよ
もろたか誰に
髪にさいたる
品のよき。

實楊の本にもならば
櫛にも後かりよ
あだしわが身の
あすならう

(以下二聯略)

といったもので、無鑑論といふよりも新體詩と小唄の味の交つたもので、蓋し當時としては出色の作であつたでありませう。譯者にも「住吉謡」「松葉賣」などの作がありますが、こゝには、「松かさ集」といふ短唱をあつめたものを一つ引用致します。

雲とみりや

雲と見ゆれど

あれは大鳥

三眼のけむり

雲の出るよな

空でない。

歸れといへば

歸りもせうが

置いてゆかれたもしほ草

波がこないと

歸られぬ。

こゝへ来て新體詩としての、形と心を備へて來ましたが、既に郷土的で卑俗で、然も形も心も古語の精神をそのまま持つて來たやうな作は、前にも半分ばかり擧げて置いた夜雨の「お才」であります。この「お才」によつて、初めて明治の新體詩は萌芽したと見る

入る。三浦の海軍少佐の

大男爵の山田

軍がつかれば喜びしいもの

佐渡の小島の夕映千鳥

春の風の寒からじ

船後出てから海まで

泣きにはるく来はせぬ

お月様さへ十三七つ

お父様よるが無難かまな

三浦の海軍

船とて知るは何時ぢややら

やはり餘と骨負廻かけて

薪木拾ふてあつたもの

お才あれ見よ 船後の國の

國が来たにと だまされて

御座山から見た筑波橋を

今は船で泣かうとは

心細さに出で山見れば

嵐のからめ山は無い。

といふのでありますが、これはまた機会なことは書がついて居りません。然しこの作

によつて久しく捨てられてゐた民謡の精神といふものが、再び形骸を改めて、詩の一分野として世の中へ出た體であります。

明治時、清白、泡鳴、白星、林外といった人々の作もあり、平井藤村は初めから民謡調に始終しましたが、不幸にして天死し、「茶摘引」一巻が残つてゐるさうですが、完全なはまだ私は見て居りません。然し「日本民謡作家集」に編録されてゐる三篇「鶴屋の娘」「鶴屋きやる」「わしの思ひは」のうち、最後のものを一つ掲げますと、

小室御道の種々の案でも

梓にあてれば鳴るものを

せめて一夜の輝のひまに

うれし情もあらうかと

ついで 泣くまい辛抱したが

切れて戻らぬ風の糸

月の照る夜は銀月の奥の

ひとつ鏡に映てきめて

わしの思ひは浅間の煙り

變りやないぞえ ほそんくと。

といふので、既に立派な民謡調を成し、又その取材も手法も卑俗で平易なところが、一家を成して居りました。然し、この民謡復古の書明朝から、ほんたうに朝がやつて来たのは、白秋と雨情の出現です。白秋は民謡復古の親といつてもよいほど仕事をしました。他の詩、小曲、童謡、短歌に於てもエポック的な仕事をしましたが、明治の終りから大正へかけて、また民謡調に心を遣し、童謡の復古と共に「城ヶ島の雨」などによつて、明かに古謡の精神を新しい調へによつて復古せしめた功績は大なるものがあります。往くところ成らざるはなく、現在ではその著作百種に及んで居ります。特にこの方面では、「思ひ出」「日本の笛」などが代表的なものであります。そしてこゝに「新民謡」といふ語彙が出来、人々は等つてこれを詩の一分野として創作して研究するやうになつたのであります。

す。例として「津島屋の買」を二つ紹介しますと
さあさあをまじやう、あなをまじやう
宵の夜半の車馬に

来たよ、来たよ、来たよ、
川河船をて
出陣のをどりの車馬に

春を始くなら、とろりと、しんと
せめて夜半のよくるまで

出陣の車馬や、泣くよに泣くよ
あつて、あつて、あつて

あつて、あつて、あつて、しんと

あつて、あつて、あつて、しんと

出陣で車馬や新隊でひやく
春の夜半の宵にひやく

件の宵取は品よく、どろく
春のほろりのむきよに

春のほろりも泣くよに泣くよ
月の夜半は泣くよに泣くよ

をどれ をどれよ まだ夜は泣く
むふた泣くよあちや気がたふぬ

歌へ歌へよ 響はりあげて
ほれてうたへば時や知らぬ

印籠いんろうよいとこ、とろりと しんと

明けりやむぐつちよが 鳴いて出る。

この野調のほかにも、筑後柳河の郷土にあるエッセイズムの唄、そのほか東京文化の色香等、殆ど詩歌全般に渉る彼の偉業は日本詩界の巨人といつた印象があります。

この白秋の多岐多岐に對して、雨情は資料單純よく郷土茨城の方言などを入れた佳作を發表し、後には殆ど日本各地の新編を作つてゐるところ、亦民間界の一大雄物であります。その前期の作「夕の月」などは代表的なものでせう。

お仲崎さま

唄の中で

しやなりく

響みしてゐる

響は歸るし

夕の月は

響こゝろの上から

出てる

つまらないよと

涙で言うた

お仲崎さま

丸顔だつけ

その他、よく世間に唄はれた「波浮の湯」や、俗調であるが時代を風刺した「枯か」など、諸君もよく御存じのこと、存じます。

更にこの時代から詩業の傍に民間唄を成した人々に、露風、柳虹、夕映、春月、夢二などがあり、主として都會的小唄が多いが、八十の出現も亦新界に買収するところ大なるも

のがあります。八十はその後も小唄、童謡に於て、特に流行歌に於て偉大なる仕事を成し遂げましたが、その聲調には詩的な、巴里風な、抒情歌があつて、純日本の洋村々に新しい風俗感情を盛り入れたのも、いかに彼が時代の寵児として活躍したかの解ります。

大正末期から昭和になり、ほんとうに民謡の情愫が理解され、古謡の研究と相俟つて、新民謡の創作はいよ／＼旺盛になつて参りました。喜島の詩にも民謡調があります。吾々の作も半数以上民謡體でありませう。その他香月、秀夫、波光、健次、五郎、廣介、又一、晋村の人々が輩出して來ました。現在でもこの人々は盛んに民謡に心を凝めて居られますが、そこにはもう明治の新體詩調もなく、又歌謡小唄との區別が明かになつて、新しい時代意識のもとに新民謡を成すところの理論と作品を持つやうになりました。

つまり民謡といふもの、聲調が初めて出來上つたのです。そして抒情小唄といつたものや、小唄や俗謡との區別がはつきりして來て、各地の新民謡と共に、自由創作がどんどん發表されるやうになりました。然しこゝにその發表について、ふしぎな矛盾が起りましたといふのはその體付けです。作曲です。音と響つて作者と作曲者が對立して來ました、そしてあるものは西洋のメロディーで、あるものは純日本のメロディーが附けられるといふ風

で、文句は純日本の百姓風俗でありながら、曲も聲調も西洋式です。藤原義江とか藤原敏子といふ人々が現はれて、日本の古謡を伊太利や佛蘭西句調で唄ひ初め、又これがコンソートの呼び物になつたのですから、時代といふものはふしぎなものです。その點で古謡のリズムを尊重する作曲に、藤井清水、中山晋平、弘田龍太郎、佐々紅華などの人々がありますが、それは又流行歌と音樂の部で、聲か、曲するでせうからこゝでは主として歌詩の方面のみを見ることにしませう。

大正末期から昭和へかけて、歌謡と共に各地の新作民謡といふものが、凄じい勢ひで盛出して來ました。兩情の「三朝小唄」「朝霞小唄」あたりから、白秋の「松島音頭」「ちやつきり節」八十の「東京音頭」から初まつて、又新民謡といふものは、歌謡と共に混亂を初めました。信州だけでも新作民謡は四十餘も出來、現今ではどんな小さな町でも、一つや二つは持つやうになりましたが、それはやがて小唄と變化したのであります。この小唄が又都會の歌謡と相俟つて、所謂小唄時代を現出したのでありますが、心ある民謡作家は、流行不易に關せず、曲にもならない歌詞を書きつゞけ、自作民謡集を詩集の一つとして刊行する流行に参りました。白鳥香雪、松村又一、大關五郎、濱田廣介、藤田健次、

藤原秀夫、渡邊政光、時雨計利の人々の民謡集は、詩の一分野として詩壇的に刊行されました。そして又一時庶民と距離するやうな状態になり、皮肉にも「読む民謡」とまで云はれる作が盛んに發表されるやうになつて参つたのです。

かうして民謡そのものは復古しながら今日に至りました。そして幸ひなことには古民謡は「復讐」として保存され、よくラジオでも放送されるやうになつて、各府縣の古い村々の古老の唄も聞かれるやうになりましたが、一方新民謡も適宜のもとに作曲され、これもレコード化されて、流行小唄と共に世間に定着するやうになりました。然し何といつてもまだ現代は小唄歌謡時代で、復讐は復讐として、郷土的に、保存的に、レコード化され、ラジオで放送紹介されますが、各自の民謡集の中にあるさまざまの作品は、まだほんたうに作曲され、普及されるに至らないのは残念なことでもあります。然しそれにも感くせず各地に於ては、民謡作品専門の雑誌が現はれ、今日では全国で四五十を算するほど刊行されて居ります。そして民謡創作専門の若い人が出て来て、各自民謡集を刊行し、この十年間には凡そ一千種も出たといふ現象を呈して居ります。その代表的なものを三四擧げて見ますと、有吾の「笑徳藤太」といふのに

笑徳藤太は

栗山を下りる

砂金の袋を腰に下げ

峠を村まで

米味噌買ひに

鼻淵うたつて

酒造をとほる

酒造に鴨が

四羽五羽六羽

藤太は鴨に

砂金を投げる

砂金はいたい

石よりいたい

木味喧嘩はす

鴨が一羽。

これは傳説を主題とした鳥話調であります。次に骨刺の「栗の木畑」といふのを再録しますと、

うらみ

くらみも

栗の木畑

お前すてゝも

花は咲く

またの

盛上りも

栗の木畑

花はひとりで

散つてゆく

更に松村又一の「風の鶴」といふのを承すと、

度せがれ田圃の 田にしでさへも

春が来たなら 鳴きもする

ましてお母やん わしや野のつぐみ

春が来たなら やるせなや。

次は藤田健次の「鯛網」といふ題

荒い波だよ

有磯の海は

赤のふんどし、四挺楯八挺楯

えんさくくく

鯛曳くうちは

とても、愛嬌、氣が強い

大漁、鯛鯛

鯛なら魚津

男伊達家の 氣で驚れる。

さて、例はほゞこの位にして、然らばこの現在の民謡界はどうなるだらうといふことを考へて見ますと、古謡に勝るほどの作曲がまだないといふことも原因ではありますが、ほんたうに時代と人間とに一致した「日本的なるもの」の本來のものが未だ現はれないとも云へるのであります。こゝが非常にむづかしいところでありまして、白秋、雨情、八十、音羽、その他にしても、作品はほゞ溢れる位ありますが、作曲がない、つまり詩と曲のよき一致がない。さればといつて古謡の形と心の模倣ばかりではならぬ、もう一步出て、既に現代に即した民謡、それは小唄、俗謡の區別なく、ほんたうに國民の、民族の心から出て唄へるもの——それがなければ駄目であります。従つて單に民謡といつても、もう古謡そのものではなく、新しい時代のものでなければならぬ。そして、それは全く曲と一

致したものでなければならぬ。多くの人に唄はれ愛されるものでなければならぬ、それを生み出すことが、將來諸君の使命であり仕事であります。

故に今日ではもういつそう視野を大きくして、歌謡、童謡、小曲に拘らず、新時代の新民謡として將來に傳へるものは、古の薄草さと、新時代の渡りさと、流行不景を踏えたところのもの、既に人間性の叫び、社會文化の聲そのものでなければならぬ。そこにはもう何の區別もなく、たゞ「謡」であり、「唄」「歌」「曲」そのものであればよいのです。従つていろいろの形式を探るとしても、心は一つであつて、實際の、真摯の、日本の、新しい民衆の歌を作すべきであります。

明治以後の民謡

明治維新以來、古い民謡はすつかり、磨けられてしまつて、歌謡としての小唄、俗曲が世の中に氾濫するやうになつたのであります。古い民謡も又生れ變つて歌謡となり、歌謡として新作されたもの、中にも、又古い民謡の味ひなり心なりを採入れたものが澤山あつ

て、これは歌謡だ、これは民謡だと一つ一つ區別するのは甚だむづかしいのであります。然らばそれをどこで見分けるかといふと、第一は民謡の淳朴な心、平易な形、地土性などから見たものと、曲から見たもので區別します。例へば「お江戸日本橋」の唄には重謡味があり、「大津繪ふし」には庶民の匂ひがあり「かつばれ」には俗曲調があり「潮来ふし」には俚謡調があるといふ風に「キーカイ節」には流行歌の萌芽があり「相馬ふし」には民謡としての歴史があるといつた具合で、文句と曲と由来の一致から區別します。現在ではレコード会社が「伊勢節」を民謡とし「東京行進曲」を歌謡としますが、歌謡の見ても引くるめて、放浪局では歌謡曲といひます。歌謡の中には軍歌も琴唄もみんなはいりませうから、古いものを無類、民謡とし、他は新作民謡も歌謡曲の中に入れておころなどは、まだその區別が不完全であります。

ところで古い民謡が、三味線太鼓や笛や囃りの力を併りて、無類として歌謡と併行してあるものに、「大島ふし」「レヨノ節」「磯ふし」「潮来ふし」「相馬ふし」「おいとこ節」「下田ふし」「木曾節」「伊勢節」「おけさ節」「小原節」「山中節」「安来節」「よきこい節」「琉球節」など澤山ありますが、どこか調子がよく、人に愛唱されるものは、

又それだけ元来の曲なり節なりが削れて、一端都會化されたものであります。こゝに音楽と曲との文化交差があつて古い音楽と曲が一つの時代の文化に巧く消化されるものは唄はれ、さもなく衝突するやうな不消化なものは捨てられてゆくのであります。これは自然の勢ひで、どうも已むを得ないことであります。従つて歌謡として、一時的現象として出来たものでも多くの人の口に愛唱されてゐるうちに、どこか強い魅力があつて捨かねるといふものは、自然に民謡的價値を持つに至つて、今日までも唄つたのであります。これは明治初年以降の歌謡の變遷を見ても明かなことであります。

戦前時代から流行した土佐の「ヨサコイ節」は、幕府方も勤王方も唄つたといふことでもあります。これなどは明かに俚謡が、歌謡になつた初めであらうと思ひます。維新になつては「トンヤレ節」から、野毛の山からノイエといふ「サイノ節」「コチャエ節」「書生節」といつたものから、花柳界でもよく唄はれる「深川かつばれ」「背戸の段垣」「奴さん」それから「木曾ふし」「織かいな」「権量ふし」「オツペケペー節」といつたものが興榮し、文明開化の世の中は消々として變化して行くといふ調子でありましたが、維新の志士の詩吟や書生ふしの後をうけて、硬骨な強カウ的なものが歌謡され、「自由の

歌」「改良よし」「歌謡よし」「ホーカイ節」となつて、町を流して歩く歌謡が、やがて書生の演歌師に代り、これが新作をどん／＼賣り賣めるにつれて、歴史的なもの、政治的なものを主題とし、更に新體詩の朗誦といふやうな調子が、巷間に廣まつて行つたやうであります。

當時の街の唄の精威、浜田、野田のいふところに據ると、各地の唄謡が都會の花柳界へ流れこんで、三味線にのるやうになり、その地方色を失つて、改めて流行歌になつたのは明治二十年から九年へかけてであるといふことであります。例を擧げて見ますと、

伊勢音頭 道分節

立山節 丹後の宮津

木曾よし 相馬よし

南来よし 米山甚句

磯よし 名古屋甚句

さんさ時雨 鹿島甚句

博多節 琉球節

などが先で「おけき節」「大島節」「安来節」「おぼこ節」「伊那よし」「唄の五本松」「小原節」などは、ずつと後の震災前であるといふことであります。そして、これらのものは地元の花柳界とか、都會の藝妓などによつて、現在でも盛んに唄はれてゐるのは「ラッパ節」や「きのき節」と大差のない位であります。

従つて今日では、純民謡とも云へば、よくラジオで地方地元有志の「田植歌」「稻刈歌」「春打歌」「白樺歌」「酒造歌」「草刈歌」「牛追歌」その他の農民の唄のみとなつてしまつたやうな譯です。尤も神事の歌や、その他労働の歌は、今もその地のその現場では唄はれて居りませうが、もう私達の耳にひびいてくるには、あまりにも時代が隔つたといふ感じがするやうになりました。

故に以上擧げたやうな、歌謡になつた民謡の中から、古謡の心と味ひとを據るとしましても、もうそこには明治といふ時代の色彩なり反響がこもつてゐるのであります。それが時代です。私達は現在の民謡を成すにしても、この時代の色調といふものをオミットするわけに行きません。それでなければ單に古謡の模倣をするばかりでありますから、凡ての焦點は時代そのものの風潮に従つて、大正、昭和となつた今日を基礎として見るべきであ

ります。さうすれば又そこに、隨ろ氣ながらも別個な時代性のある民謡調を發見するやうになりませう。例へば明治年間に出來た「有明ぶし」にしても「さのさ節」にしても、「鴨江ぶし」にしても「船頭小唄」「鶴の島」などに至るまで、その時代の術の民謡として聞くことも出来るわけでありませう。人によつてはあんな俗曲は民謡でないと申すでせうが、純な古謡でないことは勿論ではありますが、とにかく明治時代には、それより以外の民謡的掃布力をもつたものが無かつたといふ點から考へて、やむを得ないことになるのであります。

それから大正、昭和になつて多く唄はれて來たものに、

大島節	レノノ節
三崎若節	木更津若節
安來節	草津ぶし
草津湯もみ唄	文加節
おいとこ節	新庄節
秋田おぼこ	庄内おぼこ

秋田音頭	南部牛力節
よされ節	鶴三郎節
下田節	ノイエ節
郡上節	三階節
妻屋節	まだら節
山中節	三國節
中本節	デカンシヨ節
關の五本松	金比羅若々
伊豆節	黒田節
ぶらく節	鶴旗屋節
おてもやん	鹿兒島おはら

などがあり、斯くの他にも復古したり、改作されて世に出たものが澤山ありませうが、要するに歌謡といふものが今日の如く盛んになつた結果でありまして、現在では想もれた地方々々の民謡の編出しに努力して、ラジオや篤志家が協力して居りますから、發將來は

多くの民謡が復古されて参りませう。これは大いに喜ぶべき現象であると申さねばなりません。

竝で、つまり自然に淘汰されて行くのであります。新しいものに代り、古いものに新を替つたり、新しいものに古いものをカムフラードして、時代の要求に應じて行くのであります。さうして大正の初めから、我も／＼といふ勢ひで新民謡が製作されて行きました。或は温泉の宣傳に、町の紹介に、市府は勿論村々の要求に従つて各府縣は何々民謡、何々小唄、何々音頭、甚句、シャンソン（外國風な小唄歌謡）、行進曲、とあらゆる歌曲に涉つて、新しい土地々々の唄を持つやうになりました。これは一見して民謡の復古とも云はれますが、實は歌謡としての汎濫風潮であります。尤もそのなかには今時の民謡として恥かしくないものが深山あつて、歌謡曲とも呼れ、大正、昭和時代の産物として、後代に傳すべきものがあります。その代表的なものを少し挙げて見ますと、

三朝小唄 松島音頭
 朝妻音頭 上州小唄
 伊豆音頭 もやつきり節

犬山音頭 讃岐小唄
 讃岐小唄 スター民謡
 博多ぞめき 久留米小唄
 別府音頭 長崎音頭
 鹿兒島音頭 東京音頭

等々、数へたらいくつあるか解りませんが、私の聴いたのは以上ぐらゐるもので、あとは数百といふほど聴きました。心に残るほどの印象はありませんでした。そして曲はともかく、詞はやはり名のある人々のものがよく、土地の人の作は部分的には宣傳用として忠實でせうが、全體に涉つて、その市、その町、その村の氣分が出てゐません。これはやつぱり詩的經驗のある人に頼んだものが、断然よいといふ結果になりました。

然し茲に至つて新民謡といふものは、必ず樂器を伴奏とするものに定まりました。そこで音頭、小唄といった主調を伴にして、三味線、太鼓、更に行進曲風のものには洋樂器を伴奏として、一つの時代的色彩を添へることになりました。かうなると新民謡と歌謡の區別はいよいよ鮮明して、單に唄く多く唄はれればよいといふ範圍から、ヂャン／＼宣傳する

一方で、自然の情味に乏しい、無類の多い、賑々しいものになつてしまつて、昭和十二年頃になると、もう何處の新民族も大抵同じやうなものだといふことになり、はつたりと流行が止まつたのも面白い現象であります。かうして今は戦時時代になりましたので、自然に淘汰されていつて、やがてよいものだけが残るやうになりませうから、多大の費用をかけて、然も似たりよつたりの、すぐ忘れられて行くやうな作を持つた土地は、甚だお氣の毒なこと、云はなければなりません。

かうして新民族は歌謡と併行して行くやうになりましたが、古謡は古謡として、はつきり切離し、人々の鑑賞に訴へることになりましたので、だん／＼まぢらはしいものが無くなつてゆくのは結構なことでもあります。と同時に新民族の創作といふものがだん／＼困難になつてくるのも自然で、いよ／＼時代は歌謡一歩張になつて参りました。さうなると、これは小唄だ、これは民謡だ、これは軍歌だと、こまかい區別よりも、大略流行するものならんて歌謡であるといふことになります。現在は戦争で軍歌が流行る、然らば軍歌が今年の流行のトップでありますから、亦その製作費出しも多くなるといふのが一つの社会現象であります。この社会現象そのものと共に、常に傳播し、生産し、又殺されてゆくのが歌

謡であります。

一寸明治以来流行したものを列挙して見ましても、その代表的なものに、

- まのき節 テツパ節
- どん／＼節 紫ぶし
- どこまでも節 カチユーシヤ節
- 奈良丸くづし 青島節
- 鴨綠江節 馬賊の唄
- ストトン節 間がいムツンダ
- 船頭小唄 波浮の港
- 月は無情 すたれもの
- 龍の島 東京行進曲
- 青雉し 浪花小唄
- 紅屋の娘 唐人お吉
- 丘を越えて 酋長の娘

侍エツギン 島の娘

東京音頭 雨は涙か

鹿兒島おはら 影を慕ひて

赤城の子守唄 ほんとにさうなら

船頭可愛や 國境の町

野崎小唄 旅笠道中

など、もつと探したら何十曲となくありませうが、要するにこの中には多少民謡の匂ひのするものもあり、垂くの帯曲もあり、唱歌めいたもの、西洋風のノロデーのもの、マーチ風のもの、小唄風のもの、種々様々であります。これが時代の變化であり又要求で、流行は細りかへすものであるとか、唄は世につれ世は唄につれるものであるとか聞はれる所以であります。

そこで、これらのものを採録し、廣く播布したり、後代に傳したりするには、文字や寫眞ではどうにもならないので、レコードといふものが一大勢力と價値を持つやうになつたのであります。茲では今更らレコードを喋々しても初まりませんが、萬一これが何百年か

前からあつたとしたらどうでせう。あらゆる時代の各地のものが、如實に、正確に傳へられたでせうに、生憎く明治末期までは我が國に傳はりませんでした。然し一ト度び輸入されて、それが又今日のやうに調子よく改良されて、あらゆる歌曲が唄ひ込まれ、容易に販賣されるやうになつたことは、歌謡界のみならず、社會高級に涉つて産賣すべきことでもあります。もう私達は一つの唄を聴くために、その土地まで旅行する必要はなく、居ながらにしてレコードを買へば、どこに居ても、更に外國のものまで聴けるのですから、便利といふよりも、むしろあまりあつけないやうな氣がします。更に新しいものになると、毎月の新譜は夥しい數に上りますから、到底一つ一つ買つてはゐられなくなり、つい町で流行するもの、みを買ふやうになります。この競争裡にあつて、作詞、作曲、歌手の人々はどんどん新作を入れてゐるのであるから、時代のテンポといふものは驚くべきもので、自然あらゆる方面から需用に應ずることになり、現在では校歌、團體歌、社歌、宣傳歌といふものまで、盛んに世間へ流布されるやうになりました。

その競争場裡を競つて、歌謡は行進して行くのですから、愉快レコードと實演は、芝居とトーキー映画のやうなもので、歌謡も實演を聴きたいといふ人と、レコードで済ます人

とが出来、剛立して社會に浸透してゆくやうになりましたから、ますます盛んになると同時に、いよ／＼劇が多く、その批判にも、買ひ入れにも進ぶのは當然であります。その結果はどうなるか——といふことは、容易に見通しは出来ませんが、そこは衆議が衆議かといふと、大衆はなか／＼賢明なるものでありまして、面白い、味のあるものでないと、なか／＼飛びついて来ない、故に當事者の懐みと苦心が生ずるのであります。その代り一枚何か言つたとしたら、各レコード會社は利益を上げるので、宣傳戰と同時に、よいもの、賣れるものを探して製作してゐるのであります。

さうなると今日では、民謡も歌謡も、あらゆるものがレコードを介して、世の中へ出ることになるので、一方ラジオも又負けずにその紹介に努め、ラジオ、レコード剛立して歌謡やその他の音曲を庶民の耳へ送つて居ります。従つてこゝに音楽の機械化といふことが問題になつて参ります。實演でいくらよい聲の人も、ラジオやレコードを通じると、それほどでもないといふ人と、實演はそれほどでもないが、機械を通じ、マイクを通してくるとよく聞けるといふ人などが出て来て、悉く今日では機械化萬能、ラジオ、レコード全盛といふ時代になりました。

それに唱歌謡と申しても、前記のやうに、小唄もあり、軍歌もあり、新民謡もあり、俗謡もあり、俗曲もあり、新しい抒情詩の調子もあり、ドラマチックのものもあり、といふ風に別が多く、更に一時はこの主題歌といふものが、レコードとトーキーを一致せしめて、いよ／＼盛んになつて参りました。更に一時はこの主題歌といふものが凄じく流行して、劇にも、小説にも附けられたことがありました。それに新民謡と共に、個人經營の料亭、レストラン、温泉旅館まで歌謡を持つといふことになり、判る所流行性を狙つた歌謡のみで、互ひに競争し、互ひに没落してゆくといつた現象まで起つたのですから、歌謡の氾濫たるや案恐しいものであります。この後もこれがどこまで發展し、どこで止るといふ豫想はつかない位で、その数は何高に及ぶでせう。これが今日の實際の現象であります。

従つて、露骨的な、卑賤なものまで飛び出して、讀者の嘲笑と憤激を買ふやうな歌謡まで製作しなければならなくなつたり當局もこれをきびしく監視するやうになりましたが、然し内部にはいつて、よく成行きを見てゐる者にとつては、もちろんそれは一時の泡沫で、根本の田ひどころといふものは變らず、何かにつけて一年は一年と進歩しゆく跡が

見られますから、決して新聞で云々するほど危険なものではありません。明治末期と大正とは違いました。更に昭和の初めから今日まで、更にその歌謡のみをとつて見ても、異常な進歩であります。廣く一般にといふ範圍から、なるべく歌謡は平易にやさしく——といふのがレコード会社の注文であります。然し出来るだけ易しくしても、どうにも云ひ切れないものは、やつぱりそれだけの表現をとるより道がありません。それがいつしか大衆への普及となり、社会一般の言葉や常識が向上するにつれて、歌謡も亦美しいものになつて行きます。

それと同時に、社会人心の動向といふものがあつて、花柳界情緒の喜ばれる時があつたかと思ふと、風刺的な、ユーモラスなものが進へられたり、やくざ仁義であるとか、カフエー情緒であるとか、より抒情的な處女趣味が流行るとか、年々歳々その風は變化するのであります。これは大衆がさういふものを選へたがるのか、或は一レコードがそれを導くのか、恐らく双方が巧く一致した時のみ、その風は流行するのでせうが「格闘」が流行したから風潮があつたとか、心中が流行したから風潮なノロデーのものが喜ばれたとかいふことは、全く根のないことで、人は風潮なものにも進めれば、又柔順なものにも進み、

言つたらしいものゝあとには、辛いものゝあとには決々たるものといふ風に、あらゆる要求を順々に満たして行くものであります。決して「ねえ小唄」が流行したから所帯のために事變が起つたのではなく、社会の動向といふものゝ處に乘じて、何かしら大衆の要求するものを、歌謡が代表するといふことになるのであります。

初めには唄唄とか、長唄、義太夫、清元、華曲、謡曲といったものが進へられ、次に学生ぶしのやうなもの、それから節歌の歌手のもの、次がタンゴールやソブランスのもの、次が又日本的ノロデー、民謡調子、次が風刺的なもの、センチメンタルなもの、次が浪花ぶしめいたもの、やくざ仁義を主題にしたもの、新派風刺的なもの、オペラ風なもの、又小唄もの、新調調、それから唄唄、唱歌、齊唱といったもの——といふ風に進み、レコードのトップを切る主潮といふものは變化してゐるので、オペラが流行すればオペラ風のもの、大衆小説が流行すれば又その内容に應じたもの、女学生生活、ダンサー生活、その他年中行事の登山とかスキーとか、社会の正面に起る現象が、即ち歌謡の材料であつて、唄は社会を裏から見た鏡のやうなもので、その鏡を映してゐるものなのであります。

そこで外國歌謡の主眼歌が来れば、日本でも主眼歌をつける、トーキーになれば音楽映

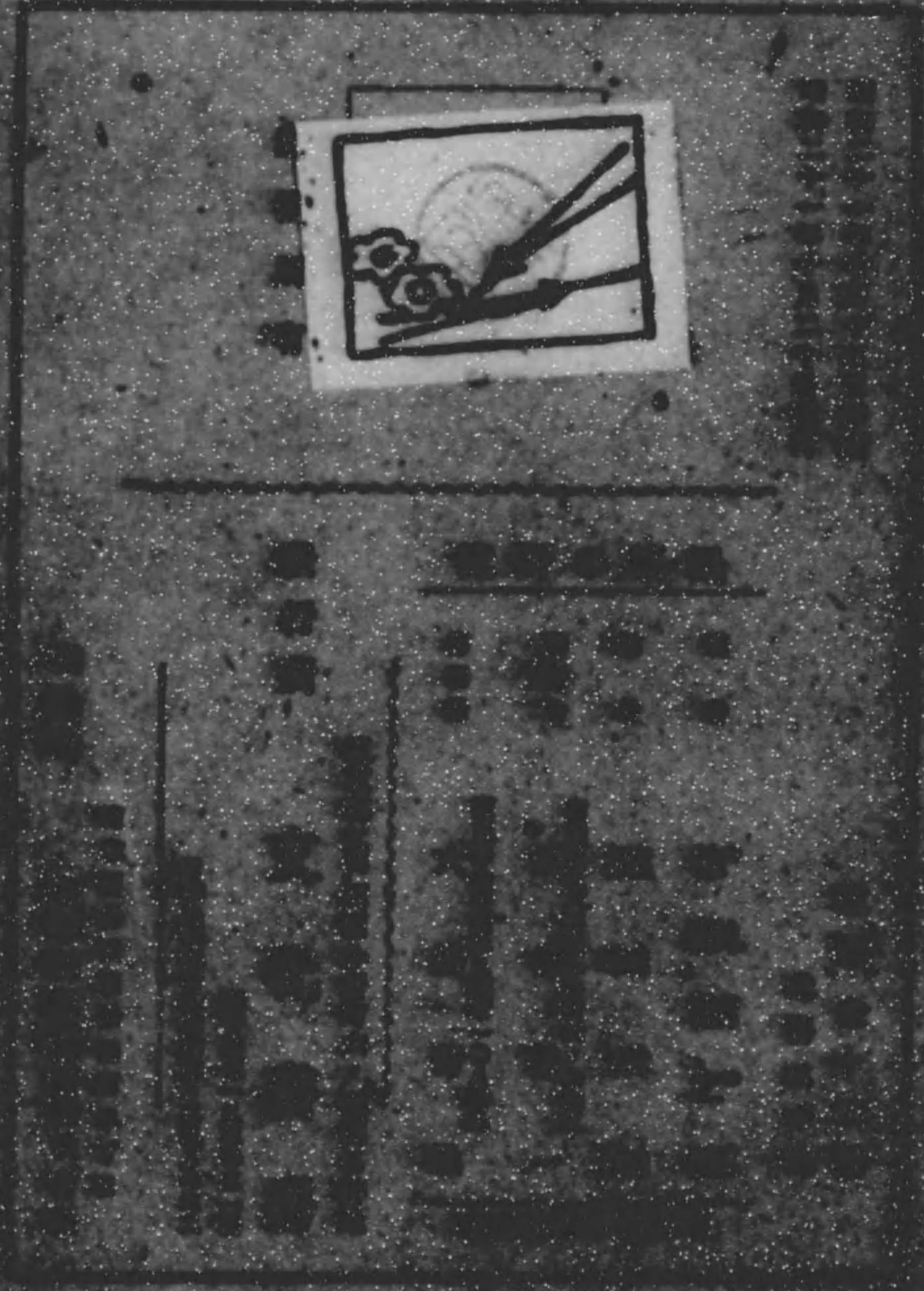
聖も作るといふ理由で、今日ほど社會と歌謡とが密接な關係にある時代も珍らしいのであります。

そこにレコード會社も、歌手も作曲家も作詞家も、社會の風氣に應じた意識と、歌身的な努力がなければなりません。單に歌謡二篇ぐらゐといふ風な態度でなく、この一篇の歌謡も、一度び市に出で萬人の口に唄はれる時はどうなるか、その結果といふものを顧慮して、餘程慎重に仕事をしませんと、世の中の己れをも毒することになりますから、その使命も亦重大であることを知らねばなりません。私は決して歌謡に道義を容れよといふものではありませんが、祖先が持つて来た「日本的なるもの」の神と、今日の明快な意識とをもち、己れの詩情を萬花鏡の如く歌はねばならないと思ふ者であります。そこに今日の民謡の代理として、歌謡全般の目的と使命があるわけで、出来るだけよい唄、愉快な唄、人を喜ばせる歌をつくらねば唱であります。

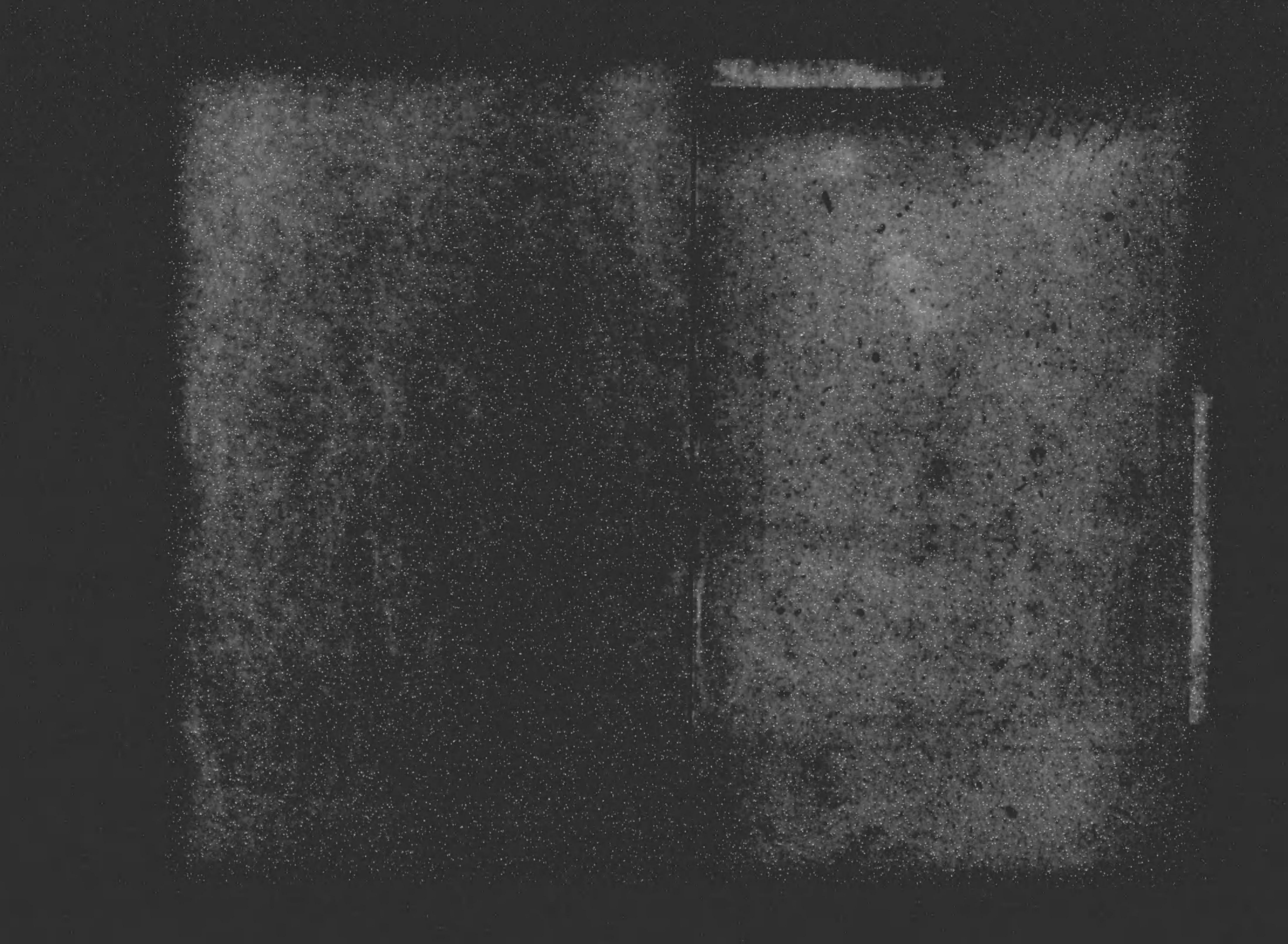
民謡にしても歌謡にしても、前にも述べたやうに、風では複製の藝術であります。決して己れが作ったとして、己れ一個のものではなく、一ト度び發表したならば、それは社會萬人のものであります。故に作家は萬人と共に喜び、共に泣き、共に苦しむのが當然で、そ

の時々の社會現象、又は、過去のもの回顧したり、未來の希望を歌つたり、人の求むるところと、己れの求むるものとの一致を計り、己を没してその作品を建すべきであります。さういふ意味から私のいふことは少し理想論かも知れませんが下劣卑賤なものを發表した作者には、下劣卑賤な結果が來ませうし、お上品過ぎるものには又その應報があらせうし、要するに自分の爲したことが反撥して返つてくることは事實で、この點が又歌手でも作曲家でも同じ運命に弄ばれることになるのであります。

で、最後に私の申上げたいことは、この消々たる歌謡の氾濫を、もつと本來の民謡精神に返せといふことであります。本來の民謡精神といつても、決してあの丁髷時代の馬子や百姓や結願の世界に属れといふのではなく、今日の庶民の、社會大家の、心の奥底にあるものに属れ、その感情を歌へといふことであります。何千年變ることのない祖國への愛、親兄弟、妻子への愛、そして自然の愛、人間の自由と苦しみ、喜びと悲しみ、その主人公となり、友となり、慰安者となり、代辯者となつて、たとへ一篇の歌謡の中にも、日本の文學の、詩の力をもつてして、限りある生命を限りなきものに向つて届けようといふことでもあります。初くもこの感情がなければ、この後の作曲家も歌手も作詞家、一時の



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100



388.91
S185

